

《シリーズ対談：教養教育とその周辺》

「人間する」ための「教養力」 —人工知能⁽¹⁾と経済合理性の時代に大学教育が果たす役割—

佐々木康成[†], 小西 賢吾[‡], 枝村 祥平[§]

1. はじめに

この対談シリーズでは、創造的であり続けること、思考を硬直化させずに柔軟であり続けること、思考をうまく表現するためのことばの使い方などについてたびたびとりあげてきた。一方で、大学教育と「社会に役立つ」ということはどのような関係にあるとよいのかについてもときおり話題としてきた。いわゆる「社会人基礎力」⁽²⁾も、「前に踏み出す力」, 「考え抜く力」, 「チームで働く力」の3つの能力を軸に社会の中で「役立つ」基礎的能力として提唱されたのだと言える。こうした論点は、急速に変化する現代社会を「社会人」として生きぬくこととどのように交わるだろうか。

「社会人として通用する」ためのスキルを獲得するということは、なんらかの「型」を身につけることに例えられる。特に日本社会においては、就職活動の服装や振る舞いからそうした「型」が求められることも少なくない。「型」を身につけることは、業務や対人コミュニケーションにかかるお互いの認知的な負荷を低減し、円滑に社会生活を進める意義を持っていると言える。その一方で、社会や文化、人間についてメタ的に思考し、そのあり方について根源的に考えることは、大学教育の中で重要な位置を占めている。文献と向き合いながらの思索、実験室で対象を分析する営み、フィールドワー

クや海外留学によるなど、さまざまな個々の経験を通じて、大学教員はメタ的で多様な視点や思考を培ってきた。ところが、こうした大学におけるプロセスは、大学が「象牙の塔」に例えられる閉じた専門研究の場として捉えられる要因にもなりえたと言える。

このような大学や大学教育に関する耳目に対して、より社会にひらかれた教育の場としてのあり方が模索される現代においては、学生の卒業した後に広がる「社会」といかに大学教育を接続していくのかについての議論もされるようになってきた⁽³⁾。また、人工知能(AI)をはじめとするテクノロジーの発展が著しい現代においては、人間の認知傾向から「仕事」のあり方まで大きく影響される中、どのような社会が構築され、人間はどのような役割が果たせるのかについても多くの議論がなされるようになってきた⁽⁴⁾。

そこで本対談では、こうした問題に対して教養教育はいかなる役割を果たせるのかについて原論的な話題も交えて考えていきたい。「型」にとどまらない自由な思考の可能性を踏まえつつ、哲学、自由、思考などのキーワードを横断しながら、本対談シリーズ7回目のゲストとして本学教養教育部の枝村祥平教授を迎えて、教養教育と「社会に役立つ」こととの間にどのような架橋ができるのかを多角的に議論してい

[†] yasaki@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

[‡] konishik@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

[§] edamura@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

く。枝村教授は、哲学、倫理学、論理学などを担当し、専門分野は西洋哲学史である。京都大学文学部哲学科を卒業後、アメリカへの6年半に及ぶ留学に続いて、2013年度から本学に着任している。例の如く、そぞろに話が進み始めて、金沢や周辺の都市としてのありかたや人の形（なり）や特徴などに言及しつつ、日本をよく表すと思われる文脈依存性と関係論についての話の続きとして、日本社会に「入る」とはどういうことであるのかを議論している場面から起こしていくことにする。

枝村(え) 場所によってはこの場は「型」を大事にすることはあっていいし、相撲業界だって入るときからこうやっていきますっていう風に標語みたいなものを見せて弟子を取るといふのとかあっていいし、永平寺とかも生活の全てが修行ですっていうのもあってイイと思いますが、日本社会全てがっていうことになると、もともとそういう社会っていうことに同意してないのに投げ込まれるっていうのはフェアなのかどうかっていう疑問は...⁽⁵⁾。

佐々木(さ) たしかに、同意はしてないよね...。

小西(こ) たしかに、社会に入るのに同意をするかどうかっていうのはおもしろい問題だったりするし、まあ、見た目とか「型」を重視するっていうのは認知的負荷が少ないからでしょうね。

さ) うん、外からは行動を見ればわかるものね。

こ) それぞれが内面を推し測っていくっていう余裕は無いのかもしれない。

え) 膨大な契約書を読んでいってっていうのもそれはそれで面倒くさいしとね。

こ) で、楽なほうに流れると...。

さ) ある種の原理でも進められるからね。認知的な負荷の問題は当たってるでしょうね。しかもハイコンテキストであればなおさ

らね。

え) それもちろん、そもそもそう言うなら日本を出てアメリカへ行けよっていうのはありうるわけですよ。そういうリアクションが出てきたときに何が言えるか。一、はいはいならアメリカへ行くよ、二、いやいやいま言ってるのはアメリカで通用すればいいということではなくて、人類に普遍的な価値のあることで、日本ではまだ受け入れられていないけれども日本人が受け入れることで日本社会が良くなるようなものなので日本社会も改善していったほうがイイ、となるのか、なかなか難しいところですね。

さ) トランプ大統領が嫌なら出て行け発言したこともありましたがね。

え) 自分がアメリカから日本にやってきたときには、ローカル共同体主義みたいなのがあって、アメリカにはアメリカの日本には日本の価値観があって、まあ郷に入りては郷に従えということもあるのかなあというのもあるのかなと思っていました。日本で就職したなら、例えば年上の人には気をつけて、というのも必要なと思ってやっていたときはあったんですけども、今、日本に帰ってきて5、6年経つてくるとアメリカが懐かしくなってきたというか、これでいいのか日本、ということもあったりして、そういう意味では私自身も揺れてるといえばそうですね。それともう一つ考えたのは、いわゆる日本の伝統というのが、いろんな要素はあると思うんですけど、何十年くらい前からのっていうのにすぎない伝統もあれば、江戸時代くらいからの伝統というのもあったり、もっとさらに長い伝統というのもあったり、というのを考えると、一番上に重視すべき最も長い伝統というのが伝統なんじゃないかなと思います。まあ、だから、ちょっと年上やったら敬えとか、学校のクラスでは空気を読んで場を乱さないとか、そんなのは千年の伝統にほど遠い

ものだと思いますね。

2. 学問との出会い

2.1. 哲学との出会い

こ) そもそも枝村先生はどういう経緯でというか、どういうことに惹かれて哲学を専攻されたんですか?

え) 中学卒業くらいのときに親にパリに連れて行ってもらって、いろいろ見たり、行く前にもフランス関連の文献を見ているうちに学問っておもしろそうだなっていうのと、あと文系と理系って両方おもしろそうだなとね。で、哲学というのは両方にcommitできるということをおもったのではないかと思います。で、大学に入るときにどこにするのか迷ったんですが、そんなに哲学とってるんなら哲学科がいいのかなってなって、理系にいたんですが文転して文学部を受験しました。ただ、大学に入って順調に勉強したかっていうとそうでもなくて、哲学を自分で続けるということであれば、大学に続けるよりも、何かの資格をもちながら食べるようにしておいた上でいろいろ書いてくということをしたほうがイイのではないかと思ってですね、でまあ司法試験の勉強をしたときもあつたんですが、まあ落ちまして(笑)、で、おとなしく大学院進学をしたということです。まあその分、哲学の勉強とか外国語の勉強とかを怠ったわけですから、大学院受験のときはそんなにフランス語とかできてなかったと思います。

さ) 学部のときの哲学のテーマってというのはなんだったんですか?

え) 卒論とかですよ。いきなりライプニッツ、でした(笑)。4年生の途中まではウィトゲンシュタインとか分析哲学とかおもしろそうとか、理系ちっくだし新しいしとかだね。でも文系にも理系にもcommitしたような昔のえらい人というのが魅力的に見えてき

て、まあよくわからんけどライプニッツかなあとかだったんですが、正直、司法試験の勉強しながらだったので、そんなにいい卒論ではなかったです。大学院入ってからはすこしだらーんとして(笑)、日雇いバイトとかもやって世間知らずを少しでもなんとかしようという感じで実社会を生で見ようとかも思っていました。

さ) んじゃあ家庭教師とか塾講師とかというのではなくってことなんですか?

え) 時期に依りますね。時間が足りなくなって時給の高いバイトっていうときもありました。

さ) 修士のときのテーマってというのは?

え) それもまああんまり深い考えがあつてっていうわけではなかったですね。まあ、普遍的な概念のリストを洗い出してそれらを組み合わせているような真理を生み出していくっていう発想がライプニッツにはあるんですけども、それについていろいろ研究してみたいなって思いました。2年ではまとめきれなかったのですこしだけズレたタイトルで提出しました。

2.2. 哲学を研究することと哲学すること

こ) ちょっと予習というわけではないですが、岩波の哲学・思想辞典で見ると、ライプニッツって哲学者って書いてなくて万能人ってあるんですよ(笑)。だからこれはすごいなあとと思って。

え) まあルネッサンス的な発想で解釈してるんでしょうけれど、ダビンチとライプニッツではまたタイプが違いますからね。

こ) その、やはり文系と理系をつなぐっていうあたりが一番枝村先生にはヒットしたんですか?

え) まあデカルトでもよかったんですが、ライプニッツのほうが広いかってね。まあでもこれがやっかいな代物で...

こ) 基本的に哲学というのはどういう営みな

んだらうかというのをまずお伺いしたいと
思っています...

え) ああそれはたしかにやっかいです(笑)。

こ) 哲学を研究するという営みと哲学するとい
う営みは違うと思ってるんですが、まずは
哲学を研究するというのはどういうことなん
でしょうか。

え) 哲学史研究と哲学研究は完全に同一とい
うわけじゃないと思います。哲学史研究とい
うのは、第二義的には、有名な人物の伝記的
事実をさらに精査して、こんなことを言われ
てたんやけど資料によって新事実がでてきて、
っていうのも哲学史研究かと思いますが、第
一義的には、哲学者が書いたと言われるテキ
ストであるとか、古代であればヘラクレイト
スに帰されているとかパルメニデスに帰され
ている言葉について自分の解釈を展開するとい
うことで、その過程で哲学的に含蓄の深い概
念について考察を巡らさなければならぬとい
うことで哲学的なことをやっているのかなとい
うことになります。またそういう営みって日
本人にとっては明治以来目新しいというもの
では必ずしもなくて、昔のお経についての注
釈とか偉い人物が書いた論に対する注釈なん
かを書いたりするというのは哲学史に近いこ
とではありますね。ただ違う面もあって、哲
学史研究というのは自分がcommitしなく
てもいいんですね。例えば、ライプニッツは
こういうことを考えていた、ということで終
わっていいんですけど、ただ、昔のお坊さん
がやっていたことは『無量寿経』の真正な解
釈はこうであるとか、『唯識三十頌』の正
しい解釈はこうであるとか、そしてそれを
真理として受けとめてそれに従って生きる
っていうところまではしばしばいってたん
じゃないかなと思います。もっと後の時代
になるとですね、いろんな学者的にいろ
んな宗派のテキストを比較してっていう
のもあって、そこはあんまりcommitしない

でっていうのもあったと思います。

こ) チベット人による仏典の注釈というの
もそういう試みを基本的にはしていたと思
いますね。教えを説くために先人の仕事に
注釈を入れるというので、自分がcommit
しないっていうのは比較的新しい傾向なん
だと思います。

え) 20世紀に文化人類学に大きな影響を
与える思潮が出てきて、構造主義ですよ
ね。まあレヴィ・ストロースさんがいろ
んな文化には固有の構造があるというこ
を言って、おなじ時代にマルシャル・ゲ
ルーという哲学史研究の大家が出てき
て、デカルトの体系には固有の構造があ
るけれどもスピノザはこうでライプニ
ッツはこうでというようになるけれど、
どれにcommitするというのではなくど
れもすばらしいそれぞれの固有の体系
として鑑賞していくという学風が、以
前に無かったわけではないでしょうけ
れども、あらためて際立ってきたとい
うことではないかな。わりと文化人類学
の思想と被るところがあるんじゃない
かな。

こ) 文化人類学はフィールド哲学である
と言われることもあり、文献を相手に
して哲学するというのと、フィールド
から哲学的な思考を取り出すという
ことで、目指すところは離れている
というわけではないような気がします。
普段の研究では一次文献に当たる
ことが多いですか？

え) 基本そうですね。

こ) ということはライプニッツだと
ドイツ語になるんですか？

え) えーと、フランス語かラテン語
ですね。というのは、ドイツ語は学
術的にはあまり使われてなかったか
らです。仲間内の情報交換ではしば
しばドイツ語で、あるいは、フラン
ス語とかラテン語とかできないお殿
様にドイツ語で哲学的な話をしてみ
たりというような感じでしょうね。
たいがい、学者同士の場合

はフランス語かラテン語ですね。

こ) そうした資料をもとに、メインでは英語で研究成果を発表するというような形ですよね?

え) そうですね。

こ) ということはさまざまな言語を渡り歩いているということですね。

え) いやー、でもインド哲学系の方とかだともっともっと多くの言語をマスターしてる方は多いわけで、まだまだ少ない方じゃないですかね。

2.3. 学問のローカリティ

こ) これまた哲学の世界で簡単には行かないとは思いますが、重要概念の翻訳可能性というのはどのようにされてるのかということなのですが、例えば、ライプニッツのキーとなる概念をどのように言語間で翻訳されてるのかなと思ひまして。

え) 例えば、アメリカ人はライプニッツ研究をやるにあたって、ちょっとしたadvantageがあるんじゃないか。例えば、ペルセプションっていうフランス語の言葉があるんですよ。でもそれってperceptionって訳してしまえばおわりやし、それで言及していけばいいわけだし、まあ楽ですよ。日本人であれば、知覚って訳したり表象って訳したりして考える。しかももともとの言葉との対応関係も考える。まあ手間がかかるわけです。ただ一方ですね、ライプニッツだとペルセプションって特殊な文脈で使うんで、一般的ないまの英語のperceptionという概念から読み込んで解釈しようとするとかえって誤解する可能性があります。そのぶん日本人の場合は、これは特殊なもんだという風に最初から決めてかかって読めるので、ある意味誤読しにくい可能性もあるということ。そこが日本人とアメリカ人がやることの違いとも言えます。

こ) そういう学問におけるローカリティの間

題というか、例えば文化人類学でもよくあるんですが、日本人が日本文化を研究する場合とアメリカ人が日本文化を研究する場合とでは見えるものが全く違ってることがあるだろうと思うんです。また、文化人類学でよく言われるのは、自文化の中にいると気づかないことがいっぱいあるから、異文化へいったほうが方法論的には発見することが多いだろうということがあるんですけども、哲学というのはそういう解釈の幅とかいうのをどこまで許容してるのかなあって。

え) ああー、それはやっかいですねー。いま小西先生がおっしゃったようなことを突き詰めると、私みたいな学風っていうのはちょっと異端になっちゃうんです。なぜかという、日本人は日本人らしく西洋哲学史を研究すればいいのに、アメリカの学会にどっぷりつかってそこに同化しようなんていうのはたいへんな間違っような学問のやり方であるというような思想にもなったりすることもあって、難しいところです。ただまあ日本人の西洋哲学史研究でそういうことを目指している研究者はおられると思います。付け加えるなら、西洋哲学史研究といっても西洋、欧米各国でそれぞれ味があるというか、フランスとアメリカではかなり学風が違うし、イタリアとドイツというのも違うところがありますね。

こ) そういう学風とおっしゃったのには、テキストをどう読むかということもあるし、自分の考えをどういう風に乗せていくかということもあって、そこに哲学研究というところに自分をというか、自分で哲学するというところもあると思うんで、ご自身の「哲学する」という営みが見えてくるのではないかという気もするんですが、その哲学するということはいへんなことだろうと思うんです。

え) はい、ほんとにたいへんです。

こ) これ、人類学するとか心理学するとい

うよりもさらに含蓄があると思うんですね。

え) いやあ、それぞれのたいへんさがあるんでしょけれども、哲学研究をされている方たちにはいろんな立場があるんでしょけれども、一つには、いや、私は歴史家なんで自分の思想などは入れない、というようにして、過去のいろんな文化を現代の言葉で説明するだけで価値がある活動なんだから私はそれだけに徹するというのもありかと思いません。もう一つは、哲学史研究をした上で現代哲学をとるか、ハイデガーだってギリシャの古典を読みながら20世紀に冠たる大哲学をやったわけで、そこまでいけるかどうかはともかくも、めざしてがんばるぞっていうのとかね。あるいは、両方やろうぜっていうふうにして、ライブニッツはこう言ったカントはこう言った、さらに私はこう言う、というふうにして、自分の問いやテーゼを立てる、というような、アメリカにはそのタイプの大物がいたりしますね。

例えば、ライブニッツ研究の大物であるロバート・アダムズ先生なんかは、ライブニッツに関するでっかい本を書く一方で、現代のあり得る宗教哲学とか道徳哲学とかについてそれぞれの本を出されているんですが、そこでは、I argue なんてらかんたらっていうのが芸風なんですよね。そやって分けていくタイプの人もあるし、ハイデガーのようにあまり分けないタイプの人もあります。あるいは、哲学史はおいといてI argueのみでいくっていう、いまの分析哲学の大物っていうのはそういうタイプの人でも少なからずいるのかなァと思います。たまには過去の偉人に言及したりもするんですけどね。

2.4. 個としての学問

こ) 先生の立場としてはどうなんですか？

え) 研究始めた頃はそこまでたいそうな考えはなかったんですが、いまはっていうと、哲

学史の論文を書くということになればプロフェッショナルとしてそのような論文を書きますが、それとは別に自分の思想を暖めていくというようなことはありますね。ちょこちょこっと哲学史研究の論文とは別のも出てるんですけども、これからもうちよっと大きなことができるようにならないとなってしまう。

さ) 例えばいまはどんなことをお考えですか？

え) いま、ですか…。うーむ、まあ、自分自身がcommitできるなあと思うのは、天台の一念三千とか、比較的短い期間の有限の経験のうちに、まあ古い言い方ですと救いを見いだす、というか、そういうとあまりにも宗教的な感じがしますが、まあ、ああこれで生まれてきた甲斐があったというようなね。

さ) わりとこの大学来てからは仏教関連のことと結びつけてというようなのはありますよね？

え) ええ、inspireされているところはありますね。ただ、まあそれをどのようにやっていくかっていうのは難しい問題で、人によってはお経というのはindubitableなものだと、ナーガールシュナのような高僧の言葉でもindubitableだろうというふうに受けとめた上で、その範囲内で、真理を見いだすというのも一つのやり方だと思うんですけども、私の場合は失礼というか不遜かもしれないけれど、お経にしても論にしても哲学的に極めて興味深いテキストとみた上で、自分がcommitできる思想っていうのはなんなのかなっていうのを考えていったほうがいいのかなって思っています。

さ) その仏教とかお経とかに関心を強くされた理由っていうのはどういうところにあるんですか？

え) あ、それはあ、留学するまではあんまり無かったんです。もちろん、京都大学には仏教の影響を受けた西田幾多郎とかいますが、

20代の頃はまだそこまで自分自身のものとしては考えてなかったんですけども、アメリカ行っているいろいろですね敬虔なクリスチャンの人にふれあっているうちに自分のルーツってなんなのかなあって考えるようになったとか、ぶらっと日本に帰ってきて日本を旅行して感銘を受けたとか、っていうのは影響としてあったと思います。

さ) ちなみに先生とところの宗派は?

え) 全然関係ない感じですね。信仰心という意味では宗教的な文化は希薄なところで育ってきたと言えますね。

さ) やはり、向こうへ渡られて比較宗教学的というようなことがあってのなんですね。向こうの宗教を知ることになって、それでというようなね。

え) それはそうですね。ほんとに、自分がどこまでcommitできるのかなあっていうときに、やはり単に理屈だけじゃなくっていままでの経験の蓄積とか遺伝的な形質とかが関わってやっている面はあると思いますね。いまは、まあ、現代人が信じるのかっていうところもあるんでしょうけれども、仏教でもキリスト教でもイスラム教でもすごいミニマリズムというのもあったりして、これはウソやとしても最低限これは本当だと言えるような突き詰めたものがあると思うんですね。こんだけ科学が発展してるんやから昔の議論でこれはウソかなというのがあるんですけどもこれだけはゆずれないよっていうようなものがあるんじゃないかなってね。

さ) ああ、もちろん科学的にみてウソっていうところはあるんじゃないかと思うけど、でも、人の現象とか本人の宗教観とか価値観というようなものの中でというのは残るであろうということでしょうかね。

え) まあまあまあそういうことであろうと思います。それもまたやっかいなところで、西洋とインドと中国と日本とそれぞれで全然違

うやないかとかっていうツッコミにどこまで耐えられるのかなっていう難しい面はあります。

こ) そこにライブニッツは関わってきますか?

え) いや、めっちゃ後付けです。私、ライブニッツ始めたキッカケっていうのには全然関係なく、始めたときはそんなたいそうな考えは全く無かったんです。結果論的にライブニッツというのは中国の研究を盛んにやった人で中国哲学と西洋哲学の共通の地平っていうのを誤解だらけではあるけれども議論してた人ですね。で、さらに、ライブニッツの直接の影響を受けてるわけではないかもしれないけど、ずっと後に、オルダス・ハックスレイが中国哲学とインド哲学と西洋哲学の共通の地平っていうのを素人くさく論じてるっていうことがあってですね、それぞれにおいてこれは共有されてるはずやっていうのをなんとか言おうとしたわけですね。その方向性にはたしかに興味を持っていて、いいかげん本でも書かなっていうのはあってですね、ルネッサンスのいろんな哲学を論じたあとにライブニッツ/ハックスレイを論じてるっていうのをプロジェクトとしてやっています。

3. 学問から学びへの応用

3.1. 脱ローカル化の思考

こ) その共通の地平っていうのを、少し角度を変えて聞くと、日々の教育活動の中では学生たちにどういう風に伝わるんでしょうか?

え) はあーそれはめっちゃ難しいですね。それは伝えられているのかなあ…。私は哲学の講義は専ら西洋の偉い人の思想を紹介していて、一方、基礎ゼミでは日本の人物について語ったりして、どうつなげるかということ、ちなみにこういう話がキリスト教ではあったりしますねって言ったり、ちなみに日本でこういう話があったりしますねって言ったり、っていうふうにしてつなげてるのがせい

ぜいですね。まだそこまでたいそうなことはできてない気がします。

さ) 例えば、そういう思想的なこととか知識的なこととかじゃなくって、そこで先生自身が考えられた考え方とかやり方、まあ学び方と言ったほうがいいかな、あるいは研究の仕方でもいいんですが、そういうのを学生たちにtransferするみたいなのってどうですか？

え) 佐々木先生好きそうな話題ですね(笑)。

さ) そういうのはないかしらっておもってるんですが...

え) そーですねー、個別的な知識よりもっと深いところの深層的なところにあるものを伝えるっていうようなことですよ。うーん、できてるのかなあ...?!?

さ) 例えば、いま教養ゼミナールの共通FD⁽⁶⁾やってるときに、そういった知識を与えたいっていうタイプの教員たちもいるかもしれないんですけども、一方でやり方を学生たちと共有したいっていう風な先生もおられるし...

え) モノポリーのゲームとか軽く見えていて、実はあ...っていうことですね。

さ) うん、そうそう、そこがほんとは伝えたいことっていうね。そういう形で枝村先生のご経験がいろんな場面で活かせることにならないかなあって思っておられることがあればお話いただけないかなあと...

え) そーですねー、リアクションペーパーとかを哲学だけでなく倫理学なんかでも課すつもりはあるんですが、基礎ゼミでは自分で考えたことをワークシートに書かせたりして、最近のニュースとか自分自身の体験とかを関連づけて考えてみると思考力も高まるし知識も定着するよって言っていて、地域を越えたり時を超えたりする思考っていうのは促したりはしているつもりです。

こ) むりやりつなげてしまうと、先生の関心として、地域とか時代とかもしくは文化的背

景を超えた思考のようなものがあるんじゃないかというところに迫りたいと思ってるんですよ。よく佐々木先生と話す中で出てくる「脱ローカル化」というのがあって、この対談シリーズのテーマの一つとして、生まれてこの方18年ずっとこの北陸で暮らしてきた学生に対して、われわれ県外から来た人間が大学で授業することによってなにかメリットがあるとすればそれはいったい何なんだろうということが気になるときがあります。われわれが教えることによって北陸社会に適應できない人間を生み出してしまうんじゃないかということはあるんですけども(笑)、まあもちろんそこまで考える義理が大学教員にあるのかどうかは分からないんですけどもね。

え) まあ難しいところですけど、例えばICU(国際基督教大学)にどっぷり浸かるとふつうの日本社会にはなかなかなじまないかもしれないけれど、海外でバリバリ活躍できる人は他の大学よりもICUを出てくる人のほうが多いとかね。

こ) そうそうそう...。もちろんわれわれが北陸に全部振ったような教育はできるわけがなくて、われわれが積み重ねてきたものを何か伝えるということではできるだろうと思います。そのなかで、人類学にしたってそうなんですが、ローカルなところに捕らわれないような思考の仕方であるとか、あるいは自分がこれまで組み込まれてきた文脈というのは必ずしも絶対的なものではないということは何らかの作業を通じて実感してもらおうであるとか、あるいはこんな研究もあるんだよということを通して知らしめるということはずごく重要なんじゃないかなと思います。実際その普遍的な思考があるということを学生に実感してもらうためにはどういう働きかけをするといいでしょうかね。

え) めっちゃむずかしいですね...。うー

ん…。

こ) もしくはリアクションペーパーとか読んでいて、あ、これはいい発見をしたとか、あ、この子は一步進んだと思うようなことがある瞬間があるとすれば、それはどんなのがあったのでしょうか？

え) 小西先生が最初におっしゃったようなことは実際レアなことだと思いますわ。いい学生だなと思うようなときでもともとその子がかなり優秀で相当人の言ったことを自分のことばに直した上で新しいことを付け加えて書ける人であるという、まあそれでいい学生だと思うわけですけど、私の課題ですごく伸びたっていうのはちょっと違う気がします。レベルが目に見えて上がったというようなのは実際少ないんじゃないかと思います。教育者としてこう言っちゃっていいのかっていうのはありますが…。

3.2. メタ思考と成績評価

さ) さっきね、非常勤の先生が研究室に来られたときも同じ話をしてたんですが、結局学生の理解度ってSかDだよっていうね。A, B, Cとかグラデーションができるのは、ちょっと休んじゃったとか、ちょっと課題提出忘れたとか、課題への取り組みがオンのときとオフのときとというような違いの足し算できあがる分布であって、実際の彼らのチカラのその科目との適合で言えば、SかDしかいないように見えるとね。実際そうかもしれないなって思うところもあって、さっき枝村先生がおっしゃったように、われわれが用意している課題とか教育的なリソースによってここからここまで進んだとかレベルが上がったというようなのがあるとしても、それを真の理解という意味で感じられる学生は少なく、おおよそ最初になんかこうざっくりした課題を課したときの彼らのパフォーマンスが期末にもそのまま、全体としてのレベルはもちろん上がるから教育の効果はあるわけ

だけれども、下から上についていうふうに入れ替わるような伸びがあるかという、ソコまでは行かない。入れ替えて上げれるほどの能力もまだまだ我々教員にもないかもしれない。彼らにもソコまで行く、あるいは行こうとする態度や動機もない子が多い。そういうことは教育系のシンポジウムとかでよく話題にされることなんですよ。そういう状況を何とかしてあげたいと思うからこそいろんな課題を課したりリアクションを取ったりするっていうことなんだとおもうんですけど、そんな中に哲学的な考え方とか見方とかっていうのを導入するといいかもしいかなあっていうような気配とか感じられることってありますか？枝村先生の哲学という立場から感じられるようなことはないですか？

え) わたしは各個人に自ら考えてもらうっていうのがあって…。

さ) それはこの3人だとその傾向だと思いますね(笑)。

え) ええ、それで、哲学的な教え方っていうのも2通りあってイイと思うんですけども、つまり、まあもっとドグマティックにここはオレの講義では受け入れてもらわんと困る、っていうような先生もいてイイと思うんですが、私自身はそこまで強気じゃないので、いろんな意見を受け入れて、もちろん露骨な人種差別などが書いてあれば注意すべきでしょうけれども、できるだけいろんな意見に対してオープンで行くっていう姿勢で臨んではいますね。その結果、多様な意見を吸い上げていくということはあると思います。まあこれは私の哲学というかメタ哲学という感じですよ。

さ) 先生ご自身の価値観としてもそういうことという意味ですよ？

え) そう、そうです。そのほうがイイと思っていますし、自分のスタイルはこれだと思っています。

さ) いまの教養教育部の人たちは多くがそういう教育観というか価値観を持っている教員が多いなあと思いますね。部内のFDなんかでもそのように感じる人が多いです。

こ) そうですねー。いわゆる哲学カフェというかしゃべり場的にしゃべりっぱなしというか、どんどんしゃべってもらって、それに対して意図的な方向付けを行わないとか、そこで出てくるものを大事にしようとかね。

さっき佐々木先生がおっしゃったSかDかっていうのは、SかBかDだと思うんですよ。Bはこなせる人、ですね。Dはアカンわってという人、それ以外に何人かアンテナに反応してくる人がSかなと。つまり、授業というのをタスクをこなす場として捉えてくる学生はやっぱりいるんですよ。そういう子たちはわりとそつなくやるんだけれども、作業としてこなすというか、課題出た、ハイやる、テストある、ハイやる、っていうふうになしてこなしてハイ単位取れたっていうことで終わるわけですね。

さ) うん、それすごくよく分かるねん。実際、そういう現実があるとも感じてます。でもお、そのB相当の子たちがはたして担当の科目で伝えたいと思っていることにどのように関感してたり同感してたりするかっていう風な視点で考えたときに、たぶんBの子たちの多くは、ボクらと同じような同感や共感をもってトピックやテーマを捉えてるのではないんじゃないか、そういう意味でSかDかでもいいでしょってね。

こ) なるほどなるほど。

さ) だから、ごく一部のSと多くのDみたいなね。A、B、Cってグラデーションがついてるのは彼らの継続性とか動機づけとか価値観や、あるいはジェネリックスキルのようになっていうのの程度の違いでついてるだけで、科目の中の内容の理解や共感や同感っていうのの程度の違いにどのくらい結びついて

いるかっていうのは、少し疑問という風に思っています。前の大学にいたときは理系の情報系だったということもあって、担当していたプログラミングの授業でも数理統計学の授業でも、もう少しモチベーションというか目的意識がはっきりしていたためか、理解しようという意図を持って臨んでいた子たちも少なからずいたように思います。そういうような理解度であったり共感度であったりという感じがしますが、どうでしょうか？

え) 私の経験からすると、例えばこんな学生たちがいました。一人はSがとて多い優秀な学生で私の担当の「哲学」の記述試験も私の説明をキレイな文章で答えててすばらしいなと思ってたんですが、ただゼミで意見を振ってみるとなかなか言えないという学生でした。一方で、GPAはそんなに高くないんだけどもいざ考えさせると自分のことばでパパッとまとめて発展的なことを言う学生がいました。この学生はたぶん成績では負けるんですけど、お二人のお話を踏まえて考えてみると、後者の学生はSに届いて、前者の学生は本来の意味でのSには届かないのかなという印象を持ちました。

全員(全) なるほど…。

え) とは言え、その前者の学生も私にとってはいい学生だと思っているんですけども…。まあ難しいですね、比較的素直な学生が多いので、あまりクリティカルシンキングっていうのに罪悪感とまでは行かなくても苦手意識を持っているとか自分には慣れないという風に思っている学生はいると思います。で、そんなようなゼミの中で私は次のようなことを言いました。世の中にはたまに思い切った発言をして物議を醸し出しちゃう人や、思い切った行動を自分の考えのもとで行ってしまっちゃうという人がいますが、もちろんそのような人の言動にはメリットやデメリットがあると思うんですけど、総合的にどう評価

するかっていうふうに抽象的な言い方をし、そのあと具体的な言い方として、例えば桑田佳祐さんという極めて才能のある歌手であり作詞家である方がいますが、あるいつとき、もらった褒章のようなのをなにかのコンサートか何かのときに口で噛んだんだそうですが、それはそのときの政権か何かへの政策に共感できないというようなことを表現しようとしたそうなんです、ネットですごく叩かれて謝罪にまでおいこまれたというようなことがあったということで、例えばこんな行動についてはどう思うかと問いますと、その前者の学生は物議を醸し出すような言動はどうかという風にかけてきたんですね…。というようなのが何かを suggest しているようにも思いますね。その学生自身の性向だったり周りの人たちのキャラだったりを示唆しているようにも思えます。私としてはね、桑田さんには謝らずにネットの声なんて無視でいいやんって思ってたんですけどね。

こ) 前にもこの話があったと思いますが、教育には二つの側面があって、一つは型にはめる教育と、もう一つは型から解き放ってあげる教育と、ということだと思います。その型破りな物議を醸すようなのをどこまで許容するかということがあると思います。それを社会にまで話を広げると大きくなり過ぎますが、少なくとも教室の中でそれが起こった場合には、それをどこまで許容できるかについては、教員側にも相当の覚悟がいるのではないかとということでもあると思います。おそらく、型にはめる教育をしていたほうが教員は楽だと思うんですね。決まったことを教えておいて、できなかつたらあなたはDです、ということで終えることができますからね。でも、教養的な関心をお持ちの先生がたからすると、それだけではおそらく満足できなくて、あるいは満足するかしないかにかかわらず、それらとは違ったことをされているだろ

うと思うんですね。なにかそのあたり、授業に臨まれる上で考えておられることはありますか？

え) うーん、それはまたむずかしいですね。私がしっかりと心構えで臨んでいるのかどうかっていうので、私自身のキャラが弱気なので、いろんなタイプの意見をそうだねって聞いてることで、結果論的なところがあるのも無きにしも非ずなのかなって思います。なにかこうまく型無き型の中に賢くはめていってということではないのかもしれませんが。その意味ではもっと改善できるっていうことはあるのかもしれませんが。

さ) その学生のコメントに対してコメントバックはされたんですか？

え) 基本的にはいつもしてるんですが、そのときはしっかりとしたのは返せてなかったと思います。何か再考を促すようなことを書いたかもしれないですけども…。スキャンして残してあるので見れるのかもしれませんが。

—中略—

3.3. 教員の自由と学生の自由

さ) そういう風な子たちがその後どうなるかっていうのを想像したときに、こう言う、ああ言うっていう子たちが多いっていうのは聞いてるから、そういうのが多いような学科と、印象としてわりとおとなしいというか突飛なことは言わないような子たちが多いように感じる学科とでは、教員の反応も変わると思うんだけど、先生の場合その反応って変わったりしますか？

え) 意図的に最初から違ったやり方でいこうっていうわけではないですけど、数回やってる内に彼らに対するスタンスがというか教員自身が適応していくということはあるかもしれないですね。

こ) んー、どーなんでしょーねえー…。僕の一年目の経済学科の基礎ゼミは元気だったんですね。だから着任直後としてはラッ

キーだったと思います。まあ、その後いろいろな学生を抱えることにはなりましたが(笑)、実は一年目が一番平和だったような気がします。しかも、そんなにリアクションはワルくなかったんですよ、いま思い出してみるとね。ただ、出口のことを考えると、突拍子も無いことを言うような子たちばかりではダメなのかもしれないですよ。いま漠然と考えていたのは、素朴な話として、我々なぜ学問をやるのかとか、なぜ教養は重要なのかと議論したりするのは、一つはこれ、我々が自由になるためにやってるんじゃないかっていうことですね。まあこれはnaiveな考えだとは思いますが、哲学者から見るとここでの自由というのは雑ぱくすぎるのかもしれませんが、自由な学風であるとか、ゼミの中では自由に発言してくれとか、何を考えても大学なので自由なんですよとか、自分しだいなんですよって教員は思わず投げかけてしまいがちですよ。ただ、自由だからこそ無秩序に陥ってしまうこともあるわけで、そのあたりの線引きというのを厳密に哲学的に考えるのと実践的な教育の現場で考えるのではちょっと意味合いが違ってくると思うんですが、そういうことって先生考えられたことがありますか？学生に自由にさせるということの意味というか...

え) んんー、これはまたムズカシイですね。ただ、既成概念から、100%解き放たれるわけではないかもしれないけれど、既成概念とはちょっとだけでも違った視点を身につけているということを勧める、ということに価値を見いだしていることはあるにはあります。それが、例えば、自由につながるということは、そうなんだと思います。まあ、完全な自由と完全な不自由というのは見いだすのは難しいんですが、自分にホントの意味で考えられることのできることで自分自身に一種のパワーが自由の度合いが上がると

というような思想が、例えばスピノザなんかではあったりすると思うんですけども、そういう考え方っていうのは今の時代でも傾聴に値するのかなと思います。ただ、もっと突き詰めると、ほんとのリバティっていうのは宗教的のところまでいってしまうのかなっていう、これでこそ生きている甲斐があったっていう実感っていうところまでいくんでしょうけれども、ただその、蝸壺のなところにとどまって満足を目指すのではなくて、視野を広げて、ああ、よかった、という風に思えるっていうのを理想として目指すというのは私も分かる気はします。

こ) そのパワーを与えるっていうのはすごくおもしろいなと思って、教育っていうのはempowermentであるということ、いわゆる力ではないんですよ。

え) 佐々木先生も「チカラ」ってカタカナで書かれるのは腕力なんかの力ではなくて、何か伸びたなっていう「チカラ」なわけですよ。

こ) それはいわゆるこなせるというようなスキルの力でもないと思うんですよ。それはなんとというか、エネルギーを伴ったものというかね。

さ) あのカタカナの「チカラ」っていうのの意味を分かっていただけのような人たちが増えるとイイなと思うんですよ...

こ) 授業をやったりして学生が元気になったなって思うようなことがあればこれはもう御の字だと思うんですけども、なにか授業を受けたりすることでなにか楽しんでくれたり明るくなってくれたりして帰ってくれたら、来てくれて良かったなって思うわけです。

え) ただね、人によってはね、新しいことを学んでガツクリしちゃうっていうのもあるかもしれないですよ。例えば、高校で部活をやってて、コーチにバンバン指導してもらって人生が変わったのに、大学に来てみると先

生が体罰っていうのは古いんだとか人権とか民主主義を尊重するっていうなら昔の指導なんてのはやめなければならぬとかいうのを聞いてすごくショックを受けたとかですね、自分の経験していたことは何だったんだ、というふうに問い直さなければならぬということがあってすごく苦痛だということもありえなくはないですよ。

さ) 「心理学」の授業でね、感情とか感じる心っていうのは優しくて柔らかいものとしてここ(胸の中や心臓)にあると思っていたのに、目や耳から入った情報が脳で処理されて云々って、けっきょく脳なのかというようなことがわかってしまうと、ちょっと寂しい、とか、知らなかったらよかった、とかいう風に言う学生はたしかにいますよ。だから、科学の力とか科学を知るというのはよくもありあしくもある、というふうに思うことがあります。

3.4. 発信するための言葉を持つ

こ) でもそれは、その学生の中である種のスイッチングが起こって、たとえ不快感を一時的に伴うものであったとしても、何らかの刺激にはなっているということで、イイことなんだと僕は考えますね。ただ僕が最近問題だと思っているのは、既成概念を壊すと言ったときに、既成概念すら構築されていないという学生が少なからずいるということですね。何の土台も無いとこでわれわれがそれをひっくり返しにいても、なんというかのれんに腕押しとか、スルーされてしまうとか、そういうのを授業の中で時々感じる場合があります。

え) それも一種の日本文化論を絡めてもいいんだと思いますが、日本では、価値観の体系を理論化、言語化するということを避けるということがしばしばあって、自分が依って立つところとか、知らず知らずのうちにやっている行動パターンであるとか、言うほどいろいろ

と言語化はできないという...

こ) その言語化するための方法とかことばを持たないとか...

え) ただ、自分の漠然ともっている姿勢とか世界観とか別の仕方と言語で表現するみたいな culture は、まあ例えば、アイラブユーは言えないけれど月はキレイですねとは言えるとか、すごく文脈依存的ではあるんだけど、とりあえずいろんな状況を含めた上でこの俳句の言葉がこの心情と対応しているとかいうのは言えなくはないというね。

さ) そういふのは、大学に来て初めて彼らが経験する教わり方であったり学び方であったりっていうことなのかもしれないですね。その言語化することで、あんなかあそこでモヤモヤしていたあれってこういうことばで表せるのかっていう理解の仕方とかね。ただ、さっきの既成概念すら無いっていう話は、概念は言葉であるので、言葉としては無いんだけど、あの感じとか、あの現象とか、あの行動とかっていうのは、たぶんみんなの中にいろいろあると思うんです。ただ、それをいちいち宣言するというか、陳述するということができないということなのかもしれない。でも、教養の科目なんかで出てきた言葉に出逢って、あの感じやあの現象やあの行動やっていうのはこの言葉で表せるのかっていうことがだんだんだんだんわかってくる、っていうプロセスは、大学に来て初めて経験する学びなのかなあ、あるいは教養での学びっていうのはそういうことなのかなあって、いま話を聞いていて思いました。

こ) たしかに、この対談シリーズでは、ことばにこだわって議論してきた面はあって、いろんな議論をする前にことばを増やしてもらわないと話にならないということはある、あるいは授業の中でことばを使いこなせるようになるかというのは非常に大きなテーマだ

と思います。僕も人文学部の1年次の授業で、みんな英語は頑張ってるけれども、18歳になったら日本語は勉強しなくてもいいということはまさか思っていないよねってね。まだまだ日本語の単語を覚える必要はありますよって言います。で、日本語の単語帳を作ってもらったりするんです。やっぱりいままでも自分の周りの世界を説明してきたことばはまだまだ限られたものであって、まだ知らない現実をうまく切り取れる概念やことばが世の中には存在してるんだということを知らしめるのは、何語であれ、重要なことばって思います。

さ) 哲学なんかの場合は、もうちょっと高次なところで、まとまる概念や分割される概念を作り出してこられたわけですよね。そういうプロセスが学生たちにも移せるといいな一と思うんですけどね。

え) なるほどー。

さ) それcreativeってということかもしれないし、批判的思考ってことかもしれないし、そういうところの教育場面で彼らを誘導できないかなあって思うんです。心理学では心的な状態を定義するための構成概念 (construct) というのをたくさん作り出してきたわけですが、その状態を表すために切り取るという言葉とともに、いまのこの感じというか考えというかそういった表象をどうやって表すかっていうようなことばというのも必要かなって思いますね。

え) まあ、日本全体っていうのをみたところでは、40年くらい前に比べいまのほうが自分の考えを文章化できる人の層が厚くなって、それがまあ、世界の中でも層が厚いといわれるブログ文化を形成しているのかなって思います。ただ、日本人ていうのはassociationっていうなかで活発に議論するっていう機会が少なくて、普段の仕事も忙しいし、他の人にも遠慮するので、ブログがそれぞれ孤立的な

ものとしてできていて、ブログが絡み合うことで化学反応が起きてdynamicな思想形成が起きている感じにはなっていないように思えますね。そういうなかで本学の学生たちがどのくらいイけるか、面白い活動をする人がポポボンッと出てきてくれればと思います。

こ) それは、associationのなかで活発に発言するのが不得意であるということは、コミュニティのほうには最適化していくということなんですか？

え) 生き様としては典型的には日頃は会社で物言わずに仕事をこなして、家に帰って独白するというようなね。中国人が言ってるようですが、日本人は自分の意見を言わないのに、ブログやツイッターでは毒を吐いている人はいるにはいるんだよねってね。

さ) 前にも言ったかもしれないけど、日本人って個になると強いつていうか、自分の中にローカルなものを作っちゃうと、その中でいろんなものを外に出してしまうというね。

こ) それはただ社会に向かわないんですよね。

え) それはそうです。江戸時代の柱の落書きみたいなもので、幕府は倒せないけどたまには自分たちの不満を表現したりする。そんなん見るとね、香港の人たちからすると日本人何やってるんだ、オレたちは東アジアで民主的にこんなに頑張ってるのっていうことになるかもしれないですね。

3.5. 主体的であるとは何か

こ) 今日枝村先生に聞いたかったのはソコも多少あって、人間観的なところもあるんですが、ライブニッツにモナトロジーというのがありますよね。あれって西洋的なselfの概念と密接につながっていると思うんですけど、その辺りはこういう議論ではどうなんでしょうか。

さ) えーと、まずはその言葉についてボクに分かるようにお願いします(笑)。

え) えーと、モナトロジーの「モナ」とい

うのは「一なるもの」という意味で、自分自身のアイデンティティは保ち続けるけれども他の誰とも違うというものですが、ただ、そのテーゼは民主主義とも封建主義ともどっちとも両立、どっちとも包摂するもので、かならずしもダイナミックに社会を対話によって変えていこうというような思想をもたらすものではないかもしれない。封建時代にはその時代のモノダがあって liberal democratic society にはそのモノダがあつてという話になるのでね。

こ) その個々に独立していてアイデンティティを確立した人間っていうのはわりと西洋的な人間像なんかなあつておもうんですが。

え) そうですそのとおりです。

こ) とすると、大学の教育現場でも、主体的であるということは善だと見なされるわけだし、アイデンティティを確立する、自分の意見を持つ、自分自身であることというのは、学生が目指す人間像として理想的なものとして捉えられているわけですよ。そういった西洋的な人間観が影響してきてるんじゃないかなって思つて、雑ぱくにはなりますが、東洋的な人間観というか、仏教的な人間観というのは、それぞれに self と identity があるというよりは、相互依存的な中で生成されていくものということになるので、それが今おっしゃっていた話とどのように関わってくるのかっていうのがすごく関心があるんです。

え) つきつめると、西洋思想というのはデモクラシーには馴染みやすいという感じですかね。

こ) そうですね。それで、いまの日本の学生や日本人の個を確立することと、そういう人間観で教育を行うことがどこまで有効性をもってくるのかなっていうことを考えたりしています。

え) めっちゃむずいすね。私が最初のほうで

言った普遍的なものを追究するということとつながってくるんですが、私自身が迷っているので、学生たちにそもそもなにを普遍的なものとしてだせるかというのは、難しいところがあるんです。私としては、一個人としての生き甲斐というか、厳密にはいまの身を生きるかもしれないけどその今における生き甲斐を見出すっていうことは普遍的であると言えるんですが、例えば人権思想とか日本において民主主義が大好きな人たちによって進められていることがどこまで人類普遍的なものかっていうのは、まだまだまだ確信がつかめてないところがありまして、東洋人としてもこれはやんなきゃっていうのがどこまで言えるのかなっていうのは、実は、迷つてるところがあります。ライブニッツだと無意識的な個の周りからの影響とか含めて全部が個なので受け身的なものもモノダだし自己主張しまくりのもモノダだしというのはあります。ただまあ、自分の知的理解をどんどん広めていくということで自分の完全性が上がるという思想はあります。だから、「世界に一つだけの花」っていうのですむじじゃなくて、やはり上下関係があるという思想ではあるのかな。ただ、西洋思想の中ではいろいろ包摂しやすい立場かなとも思います。自分とか自分の周りの状況とかを吟味して周りの人と意見を交換して生きていこうやっていう呼びかけという意味で今日的な意味はあると思うんですけど、それを北陸の学生たちがどのように受けとめるのか、あるいは私がどう受けとめるのかというのは、これまたたいへんな問題かなと思います。

こ) 素朴な話として、我々はゼミの中で発言が多いことを高く評価する傾向にはあるんですが...

え) それはそうですね。

こ) あるいは反応がいい学生、もしくは意見を多くいう学生は、我々の尺度の中では高評

価値になりがちなんだけど、それは実は無批判にやっちゃってるんじゃないかなっていうね。さっきのキレイにまとめられる子と、成績はワルいけどちゃんと発言できる子と、っていうときにどっちがいいかっていう話になるんですが、それによって我々はどういう人間を育てていってるんだらうっていうね。まあもちろん、一意的に定まるような人間を育てるといってそのものがおこがましいんだとは思いますが、ちょっと話がでかくなりましたが...

さ) でも、いまのは、さっきのブログの話じゃないけど、チャンネルとかメディアを通して彼らは個を表現するというか自分の考えを表現するということが何とかなるわけですが、誰が見つめてるか、誰がまとめていくか、誰が民主的に考えていくってなったとき、のトリガーは日本にはないわけなんですよね。頭イイ人はそういうのを使って市場を開拓したりものを作ったり政治を動かしたりするんでしょうけれども、ただそういうのに対しても批判的でいれるかとか、モニターできるかっていうようなチカラというのは今の人たちには必要なんだと思います。

こ) まあ、それを一大学の中で実現するというのはあるので、たぶんそれが今日の話の一番最初に戻るかもしれないけど、それってやっぱり頭にすごく負荷をかけることで、認知的な負荷がかかることですよ。そんな批判的に考えるのなんてめんどくさいわ、じゃあ見目で判断しようぜっていう風になりかねないわけですよ。だからこそそれにどうやって抵抗していくかっていうのは重要になってきますよね。

さ) まあ、ボクらもソコで諦めるとどんどんそっちへ行っちゃうっていうのもあるからね。

え) 載せていいかわかんないですが、橘玲さんという方がいて『言っ

い』⁽⁷⁾っていう本出してたりしますが、その人の立場としては、ちょっとまあイイかわルいかは別として、人間は生得的に認知能力に差があって、できない子をがーっと教えてもなかなかできるようなにはならないというのが現実じゃないかなあ、っていう言い方をしている、もちろんその橘さん自身のテーゼを疑うことはできるんですけども、仮にそうであった場合にですね、認知能力が高かったものが勝ち組だというふうにして笑っててイイかというところではなくて、特に大学教員にしてみれば、そんな十代に勉強できなかった子に教えてもしょうがないんだ、じゃあそういう子たちに教える教育機関も要らないよね、となれば大学数も減らざるを得ないでしょう。そんなような話をする作家もいるのが現状ではありますね。だから、努力次第で自分がどんどん伸びるぜーっていうこと自体が神話かもしれないわけです。あるいは努力次第でどんどん伸びるといえるのは一種の方便としての教えであって、全ての人をencourageするための教えであって、実際のところは科学的に言うところなんじゃないかとかいう意見も出てきてるのが今の時代であると...。ただ、まあ、いまのいわゆる科学的な論文が真理かというとはそんなことはないわけで、ちょっとした21世紀の最初に出た意見に過ぎないとも言えるわけですけどね。

4. AI時代の大学教員像—教養教育の場合—

4.1. 学びの起こる時期

こ) これもざっくりとした話ですが、努力することとか勉強ができることが、人生の成功と結びつくというストーリーが、おそらく1990年代ごろまではある程度の説得力を持っていたと思います。ある種昔の少年ジャンプ的な価値観で、みんなで努力をすれば勝利が得られる、っていうような。それで、自

分の能力を高めていって最後には敵を打ち負かすというような単純なストーリーに則っていけば、とにかく勉強頑張ろう、そしていい成績を取ろう、そしていい会社に入ろうってことを示しておけば、ある意味楽なんだけれども、それがひっくり返されたり保証がないというところにやってくるし、努力しなくても結果で何とかすればええじゃないですかくらいでなあなあになってしまうケースも多々あるんですよ。まだ我々の世代くらいまでは努力したほうがいいよねっていうのがどっかにあって、ある種身体化されてしまっていて、そういうことが節々に出てしまうんだけれども、そうじゃない価値観を持っている学生とどういう風に向き合っていけばいいのかっていうのは、最近ちょっと考えてることではあるんですよ。

え) 遊びとしてのというか、学びにはこんなにも遊びの要素があるんだからと言ってみるのも一つの方法かもしれません。ただ私の観点というのは違ったところがありまして、逆に私の世代なんかは、受験勉強は受験勉強で完結してるけれど、社会に出たらそれとは全然違う価値観で動いてるから社会に出たら気をつけろと言われて続けていたところがあって、逆に今の時代になるとこれからは知識社会で一生学び続けることで社会的に得をする、それは金銭的な得であったり社会的地位の向上という得であったりということに結びつくから学ぼうぜってなあって、むしろ、今の時代のほうが学びに対する encourage っていうかモチベーションって高い気がするんです。私の時代であれば大学受験までは思いつき頑張りましょう、入ったら入ったでサークルでばっつと遊んで、スポーツやっつていい会社に入ろう、入ったら入ったで会社のフォーマットで頑張っつて出世を目指そうってなあって、そこにあんまり学ばつて入つてこないですよ。だからいまのほうが学びに対

するモチベーションを高めていきやすいんじゃないかなあ。ネットなんかを見てると、まことしやかに経営者系の方が教養を付けようぜつていうような呼びかけをしてたり、そういう意味では、教養教育をしやすい風潮があるのかもしれないと思います。むかしはもっと体育会系だった日本社会が、ある意味で幅広い知識と全体的な判断を強調するようになってきたんじゃないかなって気がします。

こ) だからこそ、将来につながる学びっていうのが重視されるようになってきたんじゃないかな。

え) あとは、卒業後の学びの仕方をなんとなくでもいいので身につけてもらつておいて、30代とか40代に調べたいなとか考えたいなというときに一度付けた能力が目覚めるような状態になってもらうというのは、私自身も望んでることではありますね。

こ) 前の対談でも出てきたように、教養教育は即効性ではないということはそこにつながっているかもしれないですね。

さ) 出てくる知識ではなくって、出てきた考え方だったり、なんかへんな先生いたよねつていうような記憶から連想されて出てくるそのとき考えていたこととか、あるいはそういうような記憶があるよなあって記憶してるようなメタ記憶的なのが30代とか40代とかになつて発揮されることはあるだろうなあ。実際、自分のことを振り返つても、大学の教養のいくつかの科目でのある場面とかある先生の発言とかつてね、思いだしてしまうことあるのつてわりとありますからね。そりゃあ枝村先生なんて記憶に残る方やと思うで(笑)。

全) (笑)

え) その意味では濃いキャラのほうがいいんですかね…。

さ) わけがわからんほうがずっと残るもんね。

こ) うん、たしかに…。

- さ) アレ昔何やってたんでしたっけ、って卒業してから研究室に来て言う子いるから、まあそう思い返してくれるだけでもいいかって思ったりね。
- こ) たしかに。授業の内容まで覚えてなくても、なんかヘンなことやってたっていうことは覚えてくれている。そういうところかもしれないですね。
- え) ただ、前から言ってることですけど、ドグマティックな先生でも、学生の学びっていうのを促すことはあるかなって思いますね。僕の小学校時代の記憶で申し訳ないですけど、すごく優しい先生だったんですが、まあなんとなく日教組っぽいついていうかですね、日本の戦時中の過ちというのをわりと虚心坦懐にみつめて、731部隊の怖い話とかもしたり、あるいはさらに遡ってですね、明治時代とか江戸時代の封建制っていうことについて語ってたりされてたんですよ。
- さ) 731の話までされてたん!?
- え) 今考えると、ここは賛成できないとか、別の点ならもっと共感できるようになったりとかっていうのはありますもんね。その先生自身が人格者だったかっていうこともあるんですけどもね。まあまあ信念のある先生だったのでね。まあだから、これは私の意見だけれどあなたは批判的に吟味してイイよって言うんじゃないかってことでしたね。でも、今考えると、一つの問いかけであったということですよ。
- さ) オトナになればいろいろと相対化して理解することはできるわけですからね。でも、そのときそのときにどうかっていうことになると、またちょっと別の話っていう風にも聞こえますけれどね(笑)。
- こ) んー、この種の議論の話って、ドグマ的になっていう教員がいるとして、まあそれも必要なんだっていう立場でいた方がイイような気がしますけどね。
- さ) うん、健全ですよ、そのほうがね。
- こ) まあ、いろんなタイプの教員がいて、そして学生はいろんなタイプの教員に触れることによって、なにか自分を形成していくというところになっていくと思うから、あとは相性の問題もあるだろうし、仮に最悪だと思われるような教員がいたとしても、そこから何かしら得られることはあると思うから、そういうような多様性が確保されているというような状態が一番健全なんだろうなあと思いますね。
- さ) 全員がドグマティックだったら困るけどね(笑)。
- え) ドグマとドグマが対立するって、ありますよ、大学だとA先生のドグマとB先生のドグマとって両立しないんで、こっちに顔出してこっちに顔出してしながらどうしたらいいのってなるかもですね。
- さ) 大学院ならそれでイイかもやけど学部でそれはなあ、なかなかたいへんやろうねえ、学生たちにしてみればね。いや、周りの教員や事務職員にしても、っかなあ... (笑)。
- こ) 古い大学の古い学部だったらあるでしょうね。
- さ) 原理と原理と原理と原理とみたいなね...。
- こ) まあだからそういう意味での不確定性とか不確実性が大学にはあって、だからこそおもしろいというふうに考えられるようになると一番イイだろうけどね。

4.2. 大学の矮小化と大学教員の自由—実務家教員と「虚務家」教員—

- え) ただ、それは学生だけでなく、日本社会でさえ理解されない部分はあるかと思います。何かしら最近の風潮にももの申すこと言うとしたら、ネットの意見とかで大学の教員は社会貢献すべき存在なのだから、国公立であれ私立であれ国からお金をもらってるのだから、こんなこと考えてやるのはけしからんとか国に害を及ぼしているとか言われたりする

のですが、長い目で見ると国に利益をもたらすってというような思考がなかなかできていない、というような感じがします。

さ) そう、なんか、でも、むしろそのような考えのほうがnaiveな感じがしますよね。

こ) そうですね、大学とか大学教員の役割を矮小化しているように思いますね。

え) それは日本の大学の背負っている歴史も関係しているということでしょうね。明治政府がありました。帝国大学がありました。さらに多くの場合国の援助を受けて私立大学ができました。で、国の役人さんの役割が大きくてかなりhierarchyができてしまっているのですね。一方でヨーロッパの大学であれば、とある主権国家よりもはるかに歴史の長い大学があって、とある国家のできるときにそのステータスを吟味して承認するようなこともあったのかなあとね。あるいは国の関係自体が複雑でカトリックのように超国家的な組織が力を持っていたりするっていうなかで大学という特殊な組織がcreativeな活動をしてきたというのもあるのかなと思うんですよね。

さ) その歴史とかっていうところから語られる人たちとかソコを根拠に物事を語られる方たちってけっこう小さなサンプルサイズで見られていることがあるんじゃないかって思うことがよくあるんですよね。大筋そうだよって言うてるんだけど、実は小さなサンプルを辿っていったたというようですね。例えば、最初帝国大学がそうだっていうのはいくつかつかしかなからまあそれはいいとして、そこから先様々な大学ができて今に至って、この学園だってあの人がいなければできなかったわけですよね。そういう大学はわりと多くあって、そこにどういふふうなお金が入ってたかとかあるいは人が入ってたかっていうのは、なんかもっと多様な感じがするんですよ。各大学個々で見るとね。各大学多様であるにもかかわらず、歴史的に見ると結局

こういうようなhierarchyじゃんねえっていうふうにだけ見られちゃうとちょっと我々大学人としては不服だなあという気がするんですよね。

え) 今の話ってというのは、日本の大学教員の自由ということについてかなりポジティブに捉えておられるということですね。言われているほど縛られてないのだからこれからもっと自由にやっつけていこうぜっていうことをおっしゃりたいわけですよね。事実関係についてはもう少しつぶさにみていかなければならないと思います。

さ) 大筋はもちろんそうなんだろうけれども、もっと多様化してるよっていうところに目がいてない人たちが世の中にはたくさんいるからこそ、大学教員が矮小化されて見えてしまうということなのかもしれないですけどね(笑)。そうじゃないんだよっていうのを我々がどうやってどういう手段で表現せんらんのかっていうのはちょっと努力しなくちゃなんないですねって思います。

こ) そうですね。

さ) 特に教養はね。

こ) まあ学生から見るとそこまで大学教員のことに興味を持ってくれる学生はそうはいないようには思いますけどね(笑)。

全) (笑)

え) 先生たちのキャラには興味を持つかもしれないけれども、先生の研究業績とかにはまったく興味は示さないかもしれないですね。

さ) それに加えて、大学教員っていう概念そのものも、高校の先生とおんなじやと思ってるかもやからね。

こ) そうなると、最近よく言われるのは、実務家教員が増えてきているように、何らかの実務経験をもとにして職業訓練的教育を行うというのがひとつ大学教員のありかたとしてあって、ただそれが表面的には短期的な利益

を生むがためにそっちが目立つようになってくると、例えばこの対談のメンバにしても、いわば大学から大学院へとアカデミックなコースを辿ってなんらかのアカデミズムのなかで大学人としての職を得たという立場になるわけだけど、それは相対的に割合は減っていく可能性は高いわけですよ。そもそもそういう種類の人を生み出す場というのが減ってくるんだと思うんですよ。京都大学にしてもインド哲学はインド古典学に統合されてしまったと思いますし、そういうタイプの大学というのがうまれなくなってくるということはこれから考えられます。そのなかで、前に佐々木先生とお話ししたときに、実務家教員に対して我々は「虚務家」教員ではないか（笑）というような話をしていたことがあって…。

さ) そうそう言っていましたね。語呂も合っていて言い得て妙でしたよね。実数と虚数のほたらきを思い浮かべながら話していたのを思い出します。

こ) …もしそのような「虚務家」教員というのが生き延びられるとするならば、どういうことを言っていけばいいのかなとね。

え) いやーそれはやっかいな話ですねえ。いや、身も蓋もないことを言ってしまうと、世界史を見る限り大学というものにはアップアンドダウンがあって、特に大学の中でも人文系が廃れていくということであれば昔の人文学者が担っていたような仕事を金持ちの有閑層の知的能力の高い人が担ったり、あるいは今でもいるとは思いますが、経営とか経済とかで活躍している人の中で並行的に人文的な仕事を書いたりしていくようになるんですかね。17世紀ヨーロッパでもいわゆるトップクラスの人材が大学を離れていったということはあって、知的活動に関してもそういう流れというのは、僕がちっちゃかった頃と比べれば、あるにはあると言えるんじゃないでしょ

うかね。それじゃあ大学教員として身も蓋もないので、教育系の大学教員が今後どのように活躍していくかというのは人文的な活動の必要性を訴えて、かつ、人文系教養系の教員が実際に貢献してるということアピールしていく以外にはなかなかないんじゃないかと思います。でもそのアピール自体もコストといえましょう。アピールすることで疲弊していったということはあると思うし、アピールし続けることが短期的な社会の物の見方に対する迎合にもなりかねないですよ。

全) そうそうそう。

4.3. 「役に立つ」ことと教育への投資

こ) んー、そもそも役に立つのかどうかという問いをつきつけられているということそのものがあまり健全ではないということもありますよね。

え) あともう一点、役に立つという言葉の変容と言いますか、それが日本社会の浅薄なところを表現していると思うんです。もともと役に立つというのはroleがあるということでしょう。例えば、能の舞台とかで敦盛が幽霊役で立ってるねとか、熊谷直実みたいに幽霊に申し訳ないと思っている役として立っているとしているとか⁽⁸⁾だったのが、わかりやすいresultをもたらすっていうね、それが最大多数の最大幸福なのか分かんないですけど、っていうふうに読み替えられてしまってきているわけですよ。

こ) いまの学長がそのようにおっしゃっているってということもありましたよね。

さ) そうそう、つまり、社会の中で自分のroleをどうやってplayできるか、演じられるかということですね。ちゃんと演じられる学生を育てることがわれわれのミッションだという風にね。あとやっぱり我々自身が表現していかなくても、卒業していった学生たちが社会の中でどうやって表現してくれるかっていうことの方がボクは期待したいところす

ね。例えば、大学の頃にアホみたいなこと考えてたことあったわっていうようなのを社会に出てから言ってたとしても、そんなおもしろいこと考えてたんかというふうに誰かが気づいてくれば、その大学で考えたりやったりしてきたことが「役に立ってる」ことになると思うんです。社会に出て卒業生たちがそれぞれ自由になってハイ終わりということではなくて、前のことその前のことをちょっとでも反芻できるというか思い起こせるというか、そういうようなことを彼らが何度も何度もやってくれてれば、社会の中でも大学でやってたことが「役に立つ」ということになるんじゃないかとね。ボクはそう信じてます。だから卒業してからでも研究室に相談しに来たりするわけですよ。さっき一瞬トントンってやって来たのは5年前の卒業生なんだけど、たぶんここに来てちょっと考えて、んでまた出て行くというようなね。小西先生なんかもこれから学部でそういうような卒業生たちがたくさんになっていくと思うけどね。

こ) そうなってくればいいですよー。

さ) うん。それで、大学と社会の間で彼らの心を通して浸透させていってくれるんじゃないかなあって思います。たぶん、だから、ボクらの「いま」を外に宣伝するだけではダメで、卒業生たちが社会でどんなふうに振る舞ってくれるかというのを見ているということのほうが重要であるようにも思います。それが大社連携の一つになればという風に思います。手間はかかりますけどね...。まあ、そうは言っても、卒業生全員が研究室にやってくるわけではないし...

こ) ある種教育というのは投資だとも言えるし、returnだってzeroではないわけですよ。

さ) 何とかやり抜いていってる子たちはここには来ないで済んでるわけであるかもしれないし、視点を変えれば、そういう子たちは教

育は終わった子たちとも言えるかもしれません(笑)。もちろんその逆、と言える場合も多分あって、独りで悶々としている子ももちろんいるでしょうけれどもね...

こ) そう考えると、教育というのはローリスク・ローリターンな活動と言えるんですかね。

え) まあ、教育費の高騰ということを考えると、それはけっこうなリスクだという面もあるっちゃあると思いますが。

こ) お金の問題を絡めるとハイリスク・ローリターンかもしれないし、でも社会的にはローリスク・ハイリターンを期待されてるとも言えますよね。

さ) だからこそ、自由な学びができる場であるとも言えるんですよ。

こ) Returnを高めるということをより意識してしまうと、窮屈な教育ということになるわけですからね。

さ) そうすると、専門学校のようなことになっちゃうのかもしれないですね。

こ) なるでしょうね。それに、また方法論的に何が正解かというのは無いかもしれないですけどね。例えば、自然科学系の論文数はここ20年間で横ばいを続けているということから、政府が研究に競争原理を持ち込んだのは当たり前ではなかったかもしれないというのが共通認識になってきているということで、ハイリターンを求めて状況を厳しくしてもみんな疲弊してしまうだけということもあって...

さ) そうそう、結局パイは決まってて、あるいは枠組みは決まってて、その中で密度濃くできるかというのが問題なのであって、市場だってこれ以上はもう成長しませんよって時代になりつつあって、右肩上がりだった時代からいかに維持するかという時代になってきてて、そういう価値観になっていかないともうどうしようもないってところまで来つつあるわけですよ。いまのちっちゃい子たち

- は否応なくそのように学ばさせられてるでしょ。
- こ) そういう面もあるでしょうけど、どっちなんやろうなあ…。どう思われますか、子育て面から…⁽⁹⁾。
- え) ええー、右肩で行けるとはちょっと言えないですよ。いざとなったら日本から出るよってね⁽¹⁰⁾。
- こ) うちもだから世界中どこでも生きていけるのが理想で、そういう考えで子育てしてるようなところがあって、そのつもりはありますよね。
- え) それは、でも、もっと愛国的な方からしてみれば、けしからんというような子育てなのでね。
- こ) 低成長時代を意識して現状維持に特化した人になれるというのは、僕としてはおもしろくないかなって思います (笑)。
- 全) (笑)
- こ) だからといってイノベーションを起こせというのもあまりにも無責任な話だとは思いますがね (笑)。だから、いろんなことにふれていろんなことを楽しめるような人になってほしいとは思いますがね。それより先は、こどもに投げちゃうかもしれないですよ。
- さ) 日本は、そういう風にできうる社会になれるかもしれないっていう楽天的なところはあったりしますが…。
- #### 4.4. 学生の認知傾向と授業時間—マイクロラーニングと90分授業—
- こ) ちょっと話は変わりますが、企業とかの研修なんかでマイクロラーニングというやり方が浸透しているらしくって、例えば、空き時間にスマホで5分間の映像を見て研修を受けるというような形ですね。それが新任研修の新任のやり方に合うということや、あるいはその時間が集中できる限界なんじゃないかというような話もあって…。
- え) たしかに、90分は長いかもしれませんね (笑)。
- こ) 前から思ってるんですが、いまの学生の認知傾向を鑑みて、仮に授業を10分毎にぶった切ってYouTubeみたいに編集して効果とかも入れてバーンとやってよくできた映像を流したとして、そっちのほうが効果が上がってしまったとしたらどうしようっていう思考実験を常にしてるんですよ (笑)。特に、哲学の授業とかじっくりとした思索をしないと進まないとは思いますが、そういう学生の受け取り方というか認知の変化というのは感じられたりしますか?
- え) まあまあ10分っていう話にはなっていないんですけど90分話すよりは70分講義+20分リアクションペーパーのほうが効率よく学習が進んでいるという実感はしてますね。いまの学生はというわけではなくて、私の学生るときからもそうであったかもしれません。
- さ) そういうふうなビデオは、作ろうとしておられる教員もおられるようだけれど、小西先生も最初の対談のときにも同じようなことをおっしゃてましたよね。
- こ) そうそう、授業の最初にね、つかみで映像は流すんですが、第2クォータのアンケートで、この授業は視覚的だったので面白かったっていうのがあって、これをどう受けとめたらいいかというね…。
- さ) 「心理学」の授業でもね、実験があったのでよかったとか、毎回 dotCampus (本学で利用のLMS) を使うからやりやすかったとかっていうのとあんまし変わらないですよ…。
- こ) 要するに、認知的負荷が小さかったから楽でよかったって言われてるのと同じでもんね。だから、その基準で授業評価されるとたまったもんじゃないなあ、と思います。逆に、深い思索を促すような授業の場合、その評価軸だけだと、しんどかった、だけで終わらされてしまうというかね。だから、一度は

メタ的にそういうことを考えさせる場を作ったりはするんですよ。例えば、今日はビデオを見ます。...いま、みんな、楽やっておもったやろ...ってね(笑)。

全) (笑)

こ) いまのはみなさん視覚と聴覚だけに特化されています。もうちょっとほかのチカラも使いませんか、っていうところに目を向けさせる。こういうのってスポーツ学科の先生たちって自然にされてるかもしれませんね。この前の杉林先生との対談⁽¹¹⁾はそういう点からも面白かったんですよ。だから、身体を使わないで教育をしているような我々の場合は、そこんどこをうまくみ砕かないと、学生にわかってもらえたのか単に楽しめたのかってというのがわからないということもありますね。

4.5. 比喩とパラフレーズ—いかに分かりやすく表現するか—

さ) ウィリアム・ジェームズ⁽¹²⁾が言ってたっていうこの前お話したのと同じように⁽¹³⁾、学生がすでにもってるなにか、例えば、注意力であるとか興味・関心であるとか既存の知識であるとか、あるいはスキーマであるとかというところにわれわれがどのようにして結びつけてあげられるか、関係づけられるように仕向けられるかという能力が我々教員には必要だというような趣旨のことを言ってますね。

こ) ソコで重要になるなと思うのは、たとえばなし、だと思っんですよね。チベットのお坊さんの中で評価の高いお坊さんというのは、たとえばなしがうまい、っていうのがあると思います。たとえばなしというのは何かというと、聴衆の感覚に寄り添ったような事例を使ってより深遠なことをメタファーとして伝えるということなので、たしかに、授業の中でたとえばなしとかあるいは前にも対談でお話したパラフレーズというようなのは

意識していると思います。例えばなんかその枝村先生の授業ではどうでしょうか?

え) アハハハ、私自身がこどもっぽい人間なんで、何でしょう、例えば、最近『キングダム』⁽¹⁴⁾見た?ってなってというようなね(笑)。まあ、例えば、西洋の話をしていて、その大事な古典としてホメロスの『イリアス』と『オデッセイア』というのがあるって、『イリアス』にはアキレス腱の由来となったアキレスというのが出てきて、強いんだけども自由気ままに上司の言うことを聞かないってところも魅力的であったりするんですが、『キングダム』の王騎と似てるところありますねってというような話はしたことがあります。まあ、私自身が見聞きしたことの中から共通言語として話していたりということはありませんね。サッカーもよく使いますね。例えば、最澄の話をしたとします。で、サッカーを語るときにも今の時点だけじゃなくってメッシとかロナウドとかがいままでのサッカーの歴史の中でどう評価できるかというのが議論されたりしますね。そのときにはペレの話なんかもみていかないといけませんよ、そう考えると日本の精神史の中で現代のことを考える際にも過去の偉人を参照するのも大事なのではないでしょうか、ということで最澄ということになりますね。たとえ話になってますかね!?

こ) たしかにそれはわかりやすい事例だと思います。

え) ただ、独創的なたとえばなしとは違いますからね。お坊さんは本当に、例えばこんな人がいたとします、こんな動物がいたとします、というふうにして物語を作っちゃってというふうになりますからね。

さ) ああ—だから、つまりは、その人自身がクリエイティブですよ。

え) そ—ですよ。だから宮澤賢治みたいなね。それができちゃうとすごいなって思います。

こ) クリエイティブかつ話のエッセンスとかストラクチャそのものは軸としてうまく関連づけて移植できるけれども意匠はオリジナルなものをパパパッとくっつけられるというようになってるんですね。

さ) 教師だけでなく医師にしても薬剤師にしても看護師にしても師と名前がつく職業の人たちにはそういうことができないとダメだなあって思うことがよくありますね。まあ、医師の場合はそのたとえ話のほうが難しいよってというようなときがあったり、逆に簡単すぎて余計にわからなくなったりというようなことがあって、医者はダメだなあって思うときがよくあるけれどね。まあいずれにしても、その人自身が創造的になってメタファーとかパラフレーズとかっていうのを使えるというのは大切ですよね。結局、さっきのデモとか映像を見せるとかっていう方法論的なところだけでなく、もっと伝えたい本質的な情報をわれわれがどうやって伝えられるかということに腐心することは必要なわけですね。そうでないと、さっき言ってた共感とか同感というようなところにまではつながらないんだろうなあっていまの話聞いてて強く思いました。

こ) それのためのアンテナを張っておかないと学生は常に入れ替わるけれども、シラバスも含めていつもアップデートしておかないと、学生のリアルな感覚からはどんどん離れていってしまうかもしれないです。

さ) 研究だけではなくて教育のためのネタ帳もやはり必要ですね。小西先生とはGaroon(本学で利用のグループウェア)上のスペースでそういうネタになるような情報を挙げ合ってるんですけど、枝村先生はそういうのされてますか？

え) いやー、そんなまめではないので、なかなかです。

こ) 枝村先生、お子さんは仮面ライダーは見

ておられますか？

え) まだ見てないですね。

こ) ウチはこの前から見始めたんですけど、いまのシリーズ面白いです⁽¹⁵⁾。AIと人間の共存をこども向けのフォーマットでかなり深い議論というかそういうのがされています。

さ) そのフォーマットについて、学生用フォーマットというようなのもっと教員は勉強せんらんかもかもしれませんね。さっきのジェームズの話でいうところの予覚(preperception)をうまくつかむというかね。

こ) フォーマットもそうだし、うまくヒットさせられるようなのを持って来なければいけない。逆に、そんなに学生に寄り過ぎるようなことをはしなくってもいいのかもしれない。流行りの話をもってきたとしても、なんかおっさんがムリして話してるっていう風にも見られるかもですからね。まあフォーマットというか身近なものというか、授業で先生が講釈をたれるというのとは別のモードの語りというのを身につけられるかというのが一つキーなのかもしれないと思います。もちろんネタは多くもって多くのに越したことはないですけどね。

4.6. 好きなものと自己開示—学問のなかの現象論—

さ) 研究とおんなしくらい大スキな趣味とかテーマとかってありますか？

え) あはー、まあ、音楽は大好きですね。佐々木先生もよくご存知だし。だから、論理学でも哲学でも音楽の話はだしたりしますね。例えば、昔も今も金持ちはいるけれども、文化振興に対する意識は持ってほしいなという思いがあって、例えば、ベートーヴェンにはワルトシュタインという貴族・お金持ちの友人がいて、最新式のピアノをあげたところベートーヴェンは感動してソナタを作ったんだよとか⁽¹⁶⁾、知らない子もいますが、知ってる子にしてみるとよくわかるだろ

うし、ベートーヴェンは有名ですからね。

さ) 小西先生はどう?

こ) ベースは鉄道ですからねー(笑)。

え) 鉄道は使えますよね(笑)。

こ) これに反応する学生がいれば効果ありなんですけど、まあ、最近ではタピオカネタですかね(笑)。僕は雑多のものもスキなので、いろいろなを入れていこうかなとは思っています。ただ人数が多い授業だと、ネタが外れてしまうとみんなぼかーんとしてしまうことになるしね。まあそれでもジブリはありですかね。

さ) いまの子たちも見てるのかな?

こ) 見てますよー、かなり。

え) 古典ですね。

こ) 『ラピュタ』とかでも見てますからね。

さ) 『ナウシカ』は知らない子たちわりといますよ。映画でも知らない子いたからなあ。

え) 原作を図書館で薦められてましたよね⁽¹⁷⁾。難しいですよね原作は…。

さ) うん、難しいかもやけど、結末自体はわりとわかりやすく、特にpessimisticなボクとしては、納得のいく最後というか始まりましたね。

え) 佐々木先生、pessimisticには見えないですけど。

さ) 見えないとよく言われますが、そうでもないんですよ…(笑)。まあ、日常と世界に対する認識ってね、それぞれ価値づけが違ったりするんですよ(笑)。

え) でもお、日本の大学を盛り立てようっていうのは誰にも負けないうのがありますよね(笑)。

さ) (笑) そう言っただけだとありがとうございます。…ボクの場合は自分の現象論しかしゃべれない感じですね、自己開示しながら授業をするっていうかね。これはいったいボクにどんなことが起こっていたんでしょう、っていうような問いかけはよくしますね。

まあ、ただ、どこまで学生が理解したり共感したりしてくれるかっていうのはまた別の話になっちゃいますけどね…。

こ) まあそこはそれぞれの学生のうけとりかたもあるからいいんじゃないですかね。てっぱんの話は僕もいくつかあって、それこそチベットで一ヶ月風呂に入らないとか…。

さ) 前に言ってた死にかけた話は?

こ) しますねー。まあ、人類学というのは、ある種ずるいところがあって、厳密性を欠いていても突拍子もない異文化体験を放り込んでいけばインパクトだけは与えられるんですが、ただ、それ自体に甘えちゃダメだよっていう話は人類学の中ではあるんですが、まあ、チベットの山奥で何かやってたっていう話だけでなんやこの人はっていうふうにはできますから、それはよくもわるくもというところはありますね。

さ) 心理学だと小学校のときに自分が考えたり感じたりしたようなことをしゃべることってよくあるんですよ。そういうのってみなさんありますか?例えば、心理学でよくあるのは、バナナの話でね(笑)。バナナバナナバナナ…って言い続けていると、目の前にあるバナナがバナナじゃなくてもいいんじゃないか、つまり他のことばで表してもいいんじゃないかっていう感覚になる体験ってあると思うんです。いわゆるソシユールの言う言語の恣意性ということであったり、ある種のゲシュタルト崩壊様の現象であったりだとも思うんですが、これ、ボクは自分にだけ起こっていることだと思ってたんですが、心理学やってる人たちってちょいちょい同感してくれたりまさにその現象を研究しようという人に出会ったりして、自分だけではなかったんだという思いをさせられることがありました。例えば、哲学をやる人の場合、自分の中に現象としてあったよっていうようなの、ありますか?

え) ベタな話ですけど、いままでの経験は全部夢だったかも、ですかね。

全) ああーあ、なるほど。

さ) 心理学だとね、それは、いま見えているものは単に脳がつくりだした知覚であって、実は全部存在しないかも、っていうのと似てますね。

え) 例えば他にですが、自分が究極に強くなって偉くなったらっていうのを考えたときの究極ってなんやろかっていうとき、自分が宇宙の主権者になったらって思うことですが、そうなったとき、いまの自分の知能じゃどうやってそうはなれないんで、知能とか人格自体が変わってからでないとなれないので、そのときの自分って自分じゃないんやないかっていう議論ですね。

さ) そういうふう考えたことなかったなあー。

え) ファンタジーとかやったら自分が神様の存在になって、黄金の山、とか言ったら黄金の山が出てくるとかですが、本当の宇宙の主権者ってそんなeasyなものじゃなくて、全部の事象を司らなければならぬわけなので、人間の頭じゃどうしようもないし、それぞれの意思決定とかもどうしようもないんで、いまに意識の流れ自体も飛んじゃうんですね。そうなったときの自分ってもはや、知的な存在ではあったとしても、自分じゃないんじゃないかっていうね。

こ) たしかに、アフリカのどっかのトイレで蚊が死んでるかどうかさえも司らなければならぬということですね(笑)。

え) そうそうそう、イエス様があなたの髪の毛の数までも数えられているという、それですよね。そうなったときの自分って、人格があるって言われてはいるけれど、人間の人格とはかけ離れてるんやろうなってね。

さ) 心理学だとこういうのですかね。いま考えたりしてるこの意識は死んじゃうとどこへ

いくのかなあーとか、あるいはその瞬間に違う人の心に宿ることになるのかなあとか、宿ったとしてそれは自分なのかなあとか、そういう考えることは小学校のときよくやったわなあ。

え) 人格とか記憶が入れ替わったとしても何らかの同一性があるという神話を導入しちゃえば、輪廻転生はそこいら中で起こっているとも言えなくはないんですけど、でもその同一性が保たれているってもはや証明できないんで、神話となるというか、そうかもしれないしそうじゃないかもしれないしってなりませよな。

さ) だから、メタ的な何かがないとわかんないですもんね。だからね、小学校んときはこういうのいろいろ考えたよね?

こ) 考えましたね。

4.7. 怖さの絶対性と基準の評価

え) 私の母方のばあちゃんなんかは地獄の話してたんで、ほんとに舌抜かれるとか思いましたし、石切神社⁽¹⁸⁾とか連れて行かれたときはけっこうおどろおどろしてるんで、祥ちゃんわるいコトしたら地獄のえんま様が出てくるからっていうから、そういうの信じてなかったわけではないんでね。

こ) 僕は祖父が坊さんのくせに仏教的な死生観はピンとこなくて、でも、いま考えてるイマジンとか意識って脳があるからあるんだらうとか、死んだら消滅するわけで、その消滅は認知できるんだらうかっていうんでグルグル回ったりとかね。ちょうどノストラダムスの予言がどうのっていうのがあったときで、その年が来たら死んでしまうだろうとか思って勝手に怖くなってね。

え) けっこう怖かったですね。

さ) それっていくつくらいのとときやったっけ?

こ) 僕は小学校のときくらいですね。

え) 私は十代ですかね。私のちっちゃい頃ってね、核戦争関係のことをドキュメンタリと

かもいろいろやってるんでね, こんなん起こったら自分も死ぬなーとか思ったりね。そういうの怖いと思ったりね。

さ) ジブリの『となりのトトロ』のとても教育的なところっていうのは, 例えば風がゴゴゴゴォーって, 風は見えるわけじゃないんだけど, 風が見えますよね。そうやって感じる。あるいは真っ暗, ですね。真っ黒くろすけとかも出てくるんですけど, あの真っ暗っていうか, 闇っていうか, っていうのを主人公たちは体験する。ああいう体験がいまの子たちには無いでしょっていうのが, とても示唆的だという風に評論してるのを見たことがあるんですよ。なるほどな, とね。恐怖とか不安とかあるいは絶対的に怖い感覚っていうまの人たちは感じたことあるのかな。

こ) それをより厳密にいうと, 高度経済成長以降の都会で育った子は, ってことになるかもしれないけど, 例えば能登で暮らすといまでもあるんじゃないかって思いますね(笑)。能登の夜ってめちゃくちゃ怖いんですよ!車で運転したくないくらい怖いです!曲がりくねってるし街灯もないし, あんな怖いのあるのかってくらいだけど, まあ多くの日本人にとってはそういう教育的効果もあったんでしょね。

さ) そういう畏怖とまでいかななくても怖さへの記憶が無いとするとね, なにをゼロにするのかとか, それが無いとどこまででも殺してしまうとか, リブートすれば何度でも生き返られるとか, そんなことは簡単に考えるだろうなあとかね。...この前ボク怖かったのは, なんかの並べ替え作業をしたときにね, 実際にある何かの書類のね。そのとき違うやり方があったのにつて思った瞬間, ものすごい徒労感とともに, なんでいまundoでけへんのや, Command+Z⁽¹⁹⁾が無いんや, ってなっちゃんですよ(笑)。パソコンならすぐにundoできるのについてね。んで, その

とき自分ちょっとヤバくなってるとかなあって...。そういうの無いですか?

え) いろんなところでそういう徒労感ってありますよ。

さ) でね, デジタル情報ばかりを扱っていると, アナログ情報を扱ってるときでさえデジタル情報のときと同じような感覚でやってしまってるというか, 認識してしまってるというような感じを知ったときの怖さがね...

こ) ああー, デジタルに侵食されちゃったというのですね。僕もそういう経験は少なからずあるんですが, ただ, 僕自身は自閉的傾向の現れの一つじゃないかと思っていて, 決められたルートでルーチンが満たされなかったときの違和感とか何らかのインタラプトを受けたときのリカバーの難しさとかというのは僕は感じますけどね(笑)。想定外のインタラプトとかね。インタラプトが有りうると思っていれば全然大丈夫なんですけどね。さっきの話と結びつけて考えると, 宗教人類学者からすると, 意外といまの学生って畏怖とかっていうのはもってると思うんですが, それがはっきりとした集合的な形としては現れてこないだけだと思うし, 仮にないとするれば社会は全部合理化されちゃうわけで, でも実際は非合理的な方向に向かっていることがここ数十年の傾向としてはあるわけで, 例えば人を殺してみたかったっていうようなのはまだ病的だということで片付けられうるかもしれないです。...そうですね。なんかそういう怖さみたいなとかをそのままにしておけないというようなのはどっかで効いてくるのかなあ。

さ) 例えば, レポート課題なんかで, そんな4,000字なんて書けへんしい, って思ってしまう学生と, いやあ, 4,000字くらいはあ, って思ってる教員側とでは, ものすごくかけ離れてるやんか。でも, 彼らにそういう経験はしておいてもらいたいやんか。ボクなんかの

場合、負荷は高いだろうなあと思うようなのをさせたいわけだけど、それは、さっきの真っ暗とかすごい強い風とかと同じように、なにかの基準にしてほしいという思いはあるわけです。そういうのとの相対化をしてもらうことで、例えば時間管理ができるようになるとか、自分の能力管理をしてもらうとかね。

こ) その突然4,000字となったときに素直に受けとめすぎるとできないという風になるかもしれないけど、そこに何かワンクッション噛ませてほしいところがありますね。

さ) だから例えば、日頃ずっと評価Sペースで課題をやっている学生がね、期末のレポートで1,200字とかになったときにめんどくせーってなるのかどうかわかりませんが、てきとーな回答になったり提出しなかったりで、結果としてBかCにしかないというようなことも起こる。

こ) それって書くこととか思考することとかについてどういうふうにmanageするのかっていうことでもあるし、努力することが素晴らしいという価値観がどこまで浸透してるのかということでもあると思う。ただ、そういうふうには、えー、ってなってる学生にとっては、咄嗟には教員としてはまあがんばれよとしか声はかけられないから、もし、それよりイイ声かけがあるとすれば、なんでしょうね。

え) ヘタにサービスして言うのも何でしょうけど、まあ気遣うようなことは言ってみたりとかでしょうかね。

こ) まあ、がんばれよ、とは言うものの、効果はそんなにないような気がしますからね。

5. 思考と人間性

5.1. 忠実と誠実—知的情報の継承とパラノイア—

さ) さきほどの大学教員の姿というか役立つ

かどうかというようなお話の中で、教育への投資というようなことが出ましたけれど、経済的成長と知的活動との間というのはそもそもどういう関係があるんでしょうかね?

え) まあ、経済成長と知的な活動の活発化というのは別といえば別なので、経済成長は鈍化しても知的活動は上がっていくふうにしていくのは一つの手ではありますが、いまのところ十分にそうはなっていないんじゃないですかね。いろんなことがありますよね。例えば、人文関連の研究費の少なさってということもあるし、ちょっとしたことで叩かれたりするとかね。そういうなかで思い切ったtheoryというのはなかなかだしづらいといういうことは無きにしも非ずだし、あと、理論の蓄積というのも大学の内外でどの程度できているのか…。

こ) これについては多少悲観的なところがあって、その蓄積されてきたものっていうのがうまく継承されていかないっていうのが常にあるって、例えば、この前、能登で調査実習をやったときに20、30年前くらいに教育委員会がまとめた地域の調査報告書っていうのを読むと、ものすごくキッチリまとめられていて、しかも地域の歴史もちゃんと読み込んであって、すごく立派なもので、ただ、いまそういうことができる人というのが地元の教育委員会にも残ってないし、高校の先生が率先してやっておられたのに、いまではもうそういうことができなくなってきている。なので、それを大学の授業で仮にやったとしてもそれ以上のクオリティのものは出せないなというのがあって、そういうのがあった時代のわれわれが継承し切れていないというね。それは人がいないということもあるだろうし、いろんなものに対するアンテナというか感受性が狭まってきていて、特定の対象には反応するけれど一見地味で華やかでないものというのはいまなかなか目を向ける余裕がなくなって

きてるのかなとは思ったんです。

さ) 逆に昔はなぜそういう風になできたのかな。

え) んまあ、人的資源が量的にも豊富で、かつ、人同士の連携が密だったのかなあ。昔はよかったなあという話になりかねないですが...

こ) ヘンなことをちょっとでも言うとしてネットで叩かれてしまうというような状況は少なくとも30年前にはなかったし、ヘンなことを言ってる人はいまよりもっと多かったはずだし、そういうのは限られたところでパブリッシュしておけば別にそれに怒った人が突然突撃してくるわけでもないし、そういう変わった人もあるよっていう風に社会的にも許容されていた思うし...

さ) なにかにのめり込んでいても干渉されることは無かったって感じですかね?

え) あ、いやそれはでも、昔と今とでどっちがどっちというのは言いにくいところはあるんじゃないでしょうか。

さ) 教育委員会のそんな仕事なんかしてんところちやってやー、っていうのも今ならあるかもですよ(笑)。

こ) うん、いまならそうかもですが。例えば、80年代の初頭に浅田彰がパラノイアからの...⁽²⁰⁾なんてことを言ったわけですが、パラノイア的な人は社会の隅に追いやられていってるのかもしれないし...

え) どうなんでしょうかね。むずかしいですね。どっちもどっちっていう気もします。お金稼いでるぜーってというのが近代的な価値観の一類型で、そういうのがパラノイッシュだとされていたわけですが、30、40年前よりはひどくなってるんじゃないかっていう気もします。ただ一方で時代の移り変わりって激しいのでそれについていけないヤツはダメだよって言う言説はむかしよりも多くなってるので、その点に関してはパラノイア的な人のほうがちょっと損をしているのかもしれないで

すね。お金を追うってというのは昔以上なところがないですかね?どうですかね?

こ) たしかに、価値観としてはパラノイア的になってるかもしれないですね。この価値観以外はダメだっという風になってるかもしれないですね。その中でそういうことを言いつつもわりと好き勝手にうごけてしまうという状態というか。大きな枠組みは共有しながらも好き勝手にやり過ぎるとダメだということがあるって、ブレーキがかかりやすいのかなあ...

全) (沈黙)

え) あんまり仕事うまくいってなくて自由時間のある人がネットとかで道徳屋になって世の中にちょっとでも思っ匿名の仲間とともに炎上させるという、ネットっていう枠組みとともに格差社会の進行というか、浅い話で申し訳ないですが...

さ) でもさ、そういうのを政治的に使っちゃおうとか、経済的にマーケットで使っちゃおうとか、まあ頭のイイ人がちょいちょいいて、そういうのを束ねて動かすと、政治ががーっと動くとか、市場ががーっと動くとか、っていうのは、日本だけでなく世界で起こってることでしょう。だから、noisy minorityが昔よりも力を持ってしまっているのはたしかですよ。だから、パラノイアだって昔よりも今のほうが強いんじゃないの?

え) 昔に比べて良い面といえば、ちっちゃい組織の中でちょっとブラックなことが行われるというのは昔はできたんだけど今ではしにくくなってきているということもありますよね。情報がいろんなところで共有化されやすくなったので、監視社会と言えそうなんですけど、ある意味の安全性というのは昔よりも出てきたと言えますよね。

さ) その一方ででっかい企業のでっかい人のところでバーンっておっきな事件が起こるとい

うのがありますね。

え) 力が強いのでバレルまでに時間をかけられるということですね。だから、デモクラシーというのは方便としておいて、実相としては金権政治とか貴族政治をやる。とりあえずは選挙やって国会議員選んで実際は国会議員と官僚に大企業とかに金渡して動かす。でもデモクラシーということにしておけば革命も起きないし。んで、自己努力が足りなかったから収入低いんだよねっていうことにしておけば、ある程度のbrain washはできるワケですよ。

さ) アメリカだってあの選挙人制度を採ってるから個別の票数と選挙人数との間に解離が起こるわけですからね。

5.2. ひねくれ者と批判的思考

こ) この前佐々木先生に教えてもらったように、人間はひねくれ者になったからこそ文化を創ったというのがあって⁽²¹⁾、そういうパラノイア的な方向に社会や文化が動くってというのは、ある意味素直な人が増えたのかなあって気がしますね。

さ) もちょっと言うと、素直にさせられてる、ということでしょうかね。

こ) そうだと思います。人文の授業でファクトチェックとフェイクニュースの話をしたことがあって、ショートペーパーとして信憑性の高いニュースはどうやって探しますかっていうのを書かせたら、なんと半分以上の学生がとりあえず政府と大企業の言うことは信じてみるって言ってきたんですよ(笑)。

全) (大笑)

さ) ジャーナリズムはゼロだなあ... (笑)。

え) いやあでも大本営発表だから信じるしかないっていうことかも(笑)。

こ) そんなんでええのって思ったんですよ。でも、なんでもかんでも疑ってかかる人はひねくれてるって見えたのかもしれないです。ひねくれ者であるということが社会的にリス

キーになってきてるのかなっていう気もします。ソコでヘンなことを言うと炎上させられるとかね。偏屈な人だとか、政府に一々楯を突くヤツだとかとかいうふうに思われるとかね。政治的に常に疑いをもち続けている人は、そういう社会的なところからパラノイア的なところから離れた人なのかもしれない。

さ) 批判的思考に関する研究なんかも一時期たくさんあったんだけど、最近は創造的思考とか探究心とか批判的思考のもとになるようなもの話ってあんまし高らかにおっしゃっている人は多くないように思いますが、これってもうわりとそういう考え方が重要だっていうのが流布してきてるっていうことなんでしょうかね?

え) そうですかねー。ネットを見てるとそれなりに言われてる気はしますが...。ただ、その批判的思考というのも目的合理的なところがあって、偉大な経営者を見てください、みなさん常識を疑って財を成した人ばかりです、というようなね。だから、常識を疑うことででっかい経済効果を得られるようにというような考えですね。経済合理性のようなとある枠内でのクリティカルシンキングというのはあるんでしょうけれども、そういう感じでクリティカルシンキングが勧められているというのは見えるんですけどね。

こ) たしかに、経営とかコンサルの分野でクリティカルシンキングというのは多いように思いますね。

さ) それはなにか部分的に捉えられてるだけで、本来の批判的思考というのとはちょっとちがうからねえ。

こ) たぶん、ひっくりかえしてほしくないことが世の中にはいっぱいあるんでしょうね(笑)。

全) (笑) そりゃそうでしょうね。

5.3. あきらめとアウトプットのタイミング

え) まあ、全部疑うたって全部はできな

くって、ソクラテスだってここは譲れないというのあったでしょうし、デカルトだってここは伝統を受け入れてるなっていうのもあって、なかなか、ねえ…。だからといって諦めるっていうのも違うし…。

こ) そう思うと、学生の頃、批判的思考っていうのをつきつめて袋小路に入ってしまうような人は何人も見えますからね。

さ) ソコに入り込まなかった人がドクターを取っているとも言えるかもですね。

え) ある程度のところで思考停止した方が修論とか博論とかは書きやすいかもしれません。

さ) その話、最初の対談⁽²²⁾でもしたように思いますね!

こ) そう、相対化が限度を超えとなにも書けなくなりますからね。それでもわれわれがなにかを創り出すには、何かをもっておくことは必要なわけですよ。

さ) たださ、さっきのドグマティックとか原理的とかパラノイア的っていうのだけだとさ、なにも起こせなくないですかね、社会の中では…!?

こ) うん、起こせない…。

え) ただ、マイノリティの意見で、かつ、発信力があれば、影響力はありますよ。ほりえもんさんとか、間違いなくね。Twitterにしても本にしてもね。

さ) それは本人がその能力を持ってるからですよ。そういう能力がなくてさ、むかしの大学の蛸壺的な能力しかないとさ、家の中で引きこもってそれだけやってるとかだとさ、社会を動かしたり影響を与えたりっていうのはできないですよ。だから、どこかの時点で、思考停止までは行かなくてもその枠の中に入ろうとする必要はあるわけですよ。

こ) そうでしょうね。

さ) いくら理想的になにか考えててもね…。

こ) うまく言えないんですけど、その社会に

イノベーションを起こすというようなことが、実はそこまで求められなくなってきているのかもしれないなあ、という気がしますね…。

さ) そうとも言えますね。

え) いや、経済的なイノベーションはほしいけど、ガチの革命とかは困るわけです(笑)。

5.4. 認知的負荷と創造性

こ) 経済的というのにしても爆発的な何かを変えて大もうけというのではなくて、少なくとも食べるようにはしてくれというふうにして話は進んでるように思います。だから、若年層の現政権支持率が高いのはソコだっていうこととも言われてますよね。いま大問題は起こってないからへたに動かされてかき回されてはたまらんとというような話がありますからね。それがどこにつながるかということ、我々教員がこうやったほうがイノベーションを起こせるんじゃないかとか面白いこと起こせるんじゃないかとか思っても、それを発した結果、学生がピンとこないんじゃないかというね。もちろん何人かはそれに反応して面白いことをやってくれるんだけど、そればかりになるとなんや熱いことを言ってるあの人はなんやということになりかねないわけです。もちろんそれがわるいわけではなく、いいんだとおもうんですけどね。

さ) ただ、卒業していった子たちとしゃべると、日常生活の中で、すこし、ちょっとあんなことやこんなことを考えてみれてるっていうのは、やっぱり大学とか短大とかいったからであって、ただの給料もらうためだけの仕事をやってるんじゃないというふうに思えるっていうようなことを彼らが言うところからすると、そこにボクらがちょっとでも貢献できているのならいいんじゃないかなあと思う。そのためには、ボクらが創造的であったり批判的であったり教養的であったりする必要があるんじゃないかなって思う。

こ) それで、ちょっとだけひねってくれる
といいなっていうね。

さ) そうそうそう、だから、最初の対談の
ときにいかに自分を設定するかとか、常識と創
造性の間でどういう風に自分自身を位置づけ
るかとか、そういうチカラを自分の中で持て
るようになるには、やっぱり短大や大学に來
てもらったほうがいいんじゃないかなって思
います。

こ) それというのはわりと負荷のかかる作業
ではあるけれども、認知的負荷をちょっとで
もいとわなくなってくれるようになっていっ
てほしいなと思いますね。

さ) そうそう、そうですね。だから、例えば、
ちょっとしんどい仕事ややってきても、自分
の中でパチッと考えるモードに入ると、実
はそんなにしんどい仕事の話ではなかったか
もしれないなという風に考えることができたり
するかもしれないし、難しい人を前にした
ときでも多様な人がいるよねっていう風に思
えて気持ちが楽に考えれるようになったりす
るかもしれないですからね。そういうチカラ
が身について卒業していってこれればなあ
と、望むらくは思っています。

こ) ほんとにそのチカラはカタカナの「チカ
ラ」でしょうね。それは、なんというかスキ
ルというよりもパワーというかエネルギーと
いうか、スカラーなものが要るんですよ。

さ) 最近さ、ポジティブ心理学とかいうのが
出てきてて、まあなんと言うか、物事を樂天
的にというか、ポジティブに受け止めれると
いうようなチカラ、ですかね。まあ、そうい
うのが必要な社会になってきてるとも言えま
すけどね。昔はね、何らかの枠に入っちゃっ
てればというような時代もあったかもしれな
いけれど、ちょっとずつそうじゃなくなっ
てきてるからかもですね。

こ) そういうふうに、アウトプットは少なく
と持って行ければイイなとね。もちろん、研

究活動はネガティブな面を含めていかないと
進まないということはありますから、そうい
うことから出てきたのを出していければイ
イなと思いますね。...まあ、そういうような刺
激に乗ってくればイイなというところはあ
りますね。

6. おわりに

人間の知的活動や経済活動が人工知能という
強力なツールによって変革される可能性が現実
味を帯びてきている今日、意味や概念を支えて
いた情報の価値は貧弱化し、自ら蓄積した知
識をもとに知的生産を行うという人間のこれ
までの知的活動は陳腐化の様相を呈しつつあ
る。しかし、AIは人間の理解とは本質的に異
なり、意味そのものが「わかる」という状態
にはならないことから、意味を単に操作的な概念
として、あるいはプログラムされた概念として
だけで蓄えていく。したがって、人間が意味を
理解するということが、AIが意味を理解する
こととはそもそも異なるプロセスである。ところ
が、現代の人間、特に学生たちをはじめ小さ
な頃からAIやそれに近い機械、あるいは高度
に組織化された情報とふれあってきた世代は、
ことばや概念に対して、意識的であるかどうか
に関わらず、人間の特徴である因果関係や背景
を踏まえた理解をとばして、表面的な意味の理
解だけにとどまっているようにみえる。因果の
プロセスを意識せず、あるいは理解しようとせ
ず、ただ闇雲に意味の理解のみに終始し、記憶
し、自分の生活に役立てようとする傾向は少な
からずあるように思われる。自分のことばで意
味を出力することやそのメタ的な意味を理解す
ることなく、思考や認知の負荷を小さくするこ
とに腐心する傾向は、現代の人々の情報や社会
や環境に対する人間としての脆弱さを呈してい
ると言える。

この対談シリーズの中でいつもテーマとなる
のは、常識と創造との間でどのような立ち位置

や視点から意味を理解し、そして出力、つまり表現するのか、また、社会の中で論理と感情にどのような折り合いをつけながら人間として振る舞っていくのかという「教養力」に支えられた「人間する」活動についてであった。それは、個々人の時間と空間にそれぞれ置かれた状況や過程や現象、あるいは周りの世界をどのようにその個人が位置づけるか、相対化するかという作業過程であるとも言える。例えば、「教養力」を簡潔にモデルとして表現すれば、図1のような2軸モデルで表すことができると考える。また、横軸を物事の見方や思考の立ち位置あるいは価値の次元、縦軸を心や思考の使い方あるいは感情の振れ幅と捉えれば、図2のように表すこともできるかもしれない。われわれ大学人は、おおむねこれらの2軸の中を右往左往しながら人間活動してきたように思う。特に、図1の第1象限での活動を目指していると言って反対する大学人は少ないだろう。しかし、多くの教育は、初等中等教育を含め、高等教育ですら第2象限に留まるあるいは留まらざるを得ない教育を行っているのかもしれない。一方で実際の世の中、つまり社会では、第3象限で動いている状況や場面に出くわすことが多々あると言ってよい。はたして、大学の教育、特にこのシリーズで議論の中心にある教養教育は、第1象限を目指しながらも他の象限を包含しつつあるいは見据えながら学びの過程を与えていかねばならないのだろうか。役に立つ教育、役立たせる学びを視野に入れながらも、人間として学び、生きる学生たちに教養のチカラを身につけていってもらうための機会と努力をわれわれ大学人はいつも自由のなかで創造していかなければならないことをあらためて気づかされる今回の対談となったことは間違いない。

人間として生きる、ということの社会的な意味をどのように捉えていくか。経済的な合理性が求められて久しいこの時代の人間としてのあ

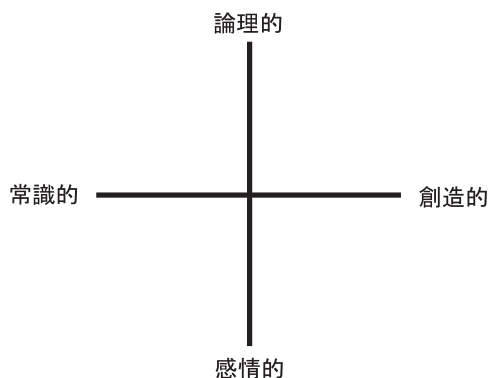


図1 「教養力」に関する2軸モデル

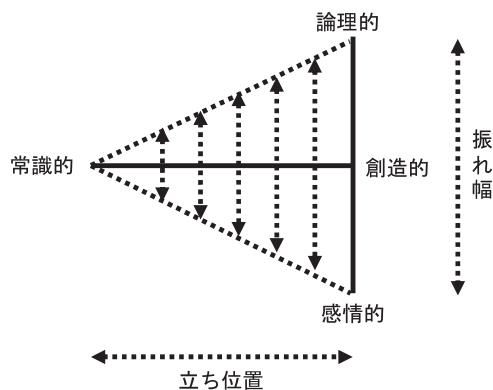


図2 「教養力」による思考過程の立ち位置設定と思考方法の振れ幅に関する2軸モデル。立ち位置の軸は認知的負荷の大小の軸と読み替えることもできる。

り方をどのように教養教育のなかに織り込んでいけばよいか。われわれ大学の教員の教育との向き合い方も含めて、学びの中に「教養力」的なチカラを醸成していける過程や機会を多様に設けていくことが解の一つであると信じて、教養教育の可能性を今後も議論していきたい。

注

- (1) 本稿で言及する「人工知能 (AI)」という言葉は、計算機科学の一分野や一技術あるいは一システムとしての意味だけでなく、現代の社会のあり方や人の認知傾向が「人工知能」に象徴される知的な機械やソフトウェアに依存しつつあることを現象として捉えるためのことばとして広い意味で用いていることに留意してほしい。
- (2) <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>
社会人基礎力 (経済産業省) (参照日:2020年1月)
- (3) 例えば、
溝上慎一 (<http://smizok.net/>)
『高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題—』溝上慎一, 京都大学高等教育研究開発推進センター, 河合塾 (編集) (学事出版, 2018年)
- (4) 例えば、
〔特集〕AIネットワーク化と経済・社会・法システムの変容, 情報通信政策研究, 第2巻第1号, 2018年 (https://www.soumu.go.jp/iicp/journal/journal_02-01.html)
AINOW (<https://ainow.ai/what-ainow/>)
- (5) このようなことを言うと、例えばヒュームは同意に基づかない慣習の規範的価値を認めていたのではないかといった反論が予想される。だが彼にしても、どのような慣習も文化として尊重しようと論じていたわけではなく、例えばカトリックの文化を押しつけがましく経済活動を促進しないものとして批判的に扱ったりしているわけで、多くの場で型に合った行動を求める現代日本社会の慣習を好意的に受け止めたかは疑問である。
- (6) 本学の各部の教員の代表数名から成るFD組織で、年度毎に複数のテーマについてそれぞれ議論を重ねるFD活動である。ここでは1年次ゼミナールに関するテーマを扱う共通FDを指しており、2020年度から経済学部と人文学部の1年次学生を対象に新しく開講される「教養ゼミナール」では、クォータ毎にゼミの担当者が入れ替わる形で担当し、担当者の専門分野周辺のトピックと方法論の多面化による学生の多様な学びと、複数の担当者による協同的な教育のありかたを実現できるようなデザインでの新しいゼミナールのシステムについて議論している。
- (7) 『言ってはいけない—残酷すぎる真実—』橘玲 (新潮社, 2016年)
- (8) 世阿弥作とされる能の演目「敦盛」では、平敦盛は熊谷直実に討ち取られたが、後に幽霊として直実の前に現れる。その時直実はすでに武士ではなく、出家し敦盛をうやむやの僧、蓮生となっていた。
- (9) 小西は二児の父、枝村は一児の父である。
- (10) 付記すると枝村の子の母親は中華人民共和国出身であり、本人も中国の旅行証を所有している。
- (11) 佐々木康成, 小西賢吾, 杉林孝法(2019)学びにおける身体感覚の効用—スポーツと教養の接点を探る—, 金沢星稜大学人文学研究, 第4巻第1号, pp.31-61
- (12) アメリカの機能主義心理学者。ヴァントとともに心理学の祖とも言われる。
- (13) 『心理学 (上)』W. ジェームズ (著), 今田寛 (翻訳) (岩波書店, 1992年), pp.328-329
- (14) 『週刊ヤングジャンプ』(集英社) で2006年から連載が続いている, 始皇帝となる秦王と配下の將軍李信を主人公とした漫画のこと。
- (15) 『仮面ライダーゼロワン』テレビ朝日系列で2019年9月から放送の特撮テレビドラマ。AIを搭載したアンドロイドが実用化された世界が舞台になっている。
- (16) ベートーヴェンの作品のうち、ピアノソナタ第21番ハ長調Op.53のこと。もっとも、ベートーヴェンがワルトシュタインから経済的な援助を受けていたこと、同ソナタがワルトシュタインに献呈されたことは事実ではあるが、エラール社のピアノをワルトシュタインが購入してベートーヴェンに贈ったという記録は見つからないので、不正確な発言であった。
- (17) 本学附属図書館では、学生向けの推薦図書や簡単な書評とともに職員から募っている。
- (18) 大阪府東大阪市東石切町にある石切劔箭神社のこと。
- (19) Apple Inc. の macOS では command+z, Microsoft Corporation の Windows では ctrl+z で一つ前の作業に戻ることができる。
- (20) 『逃走論—スキゾ・キッズの冒険』浅田彰 (筑摩書房, 1986年)
- (21) <https://wired.jp/2019/09/01/recursive-language-and-imagination/>
人類の文化的躍進のきっかけは、7万年前に起きた「脳の突然変異」だった:研究結果 (WIRED) (参照日:2019年9月)
- (22) 佐々木康成, 小西賢吾(2016)教養での学びとそのデザイン—常識と創造性のはざま—, 金沢星稜大学人文学研究, 第1巻第1号, pp.87-97。